

続・朝光寺原式土器の根源的研究

—大場富士塚遺跡の弥生土器をめぐって—

坂本 彰・宮田 毅

目次

はじめに

1. 大場富士塚遺跡の弥生後期集落址
2. 大場富士塚遺跡の弥生後期土器
3. 大場富士塚遺跡の朝光寺原式土器について
4. 大場富士塚遺跡の縄文時代終末期・弥生中期土器
5. 口縁上端内側に刻目文を施す土器の意義

おわりに

はじめに

2022 年以降、私たちは南関東弥生後期の一地域型（様）式である朝光寺原式の成立に関わる資料の調査を進めてきた。

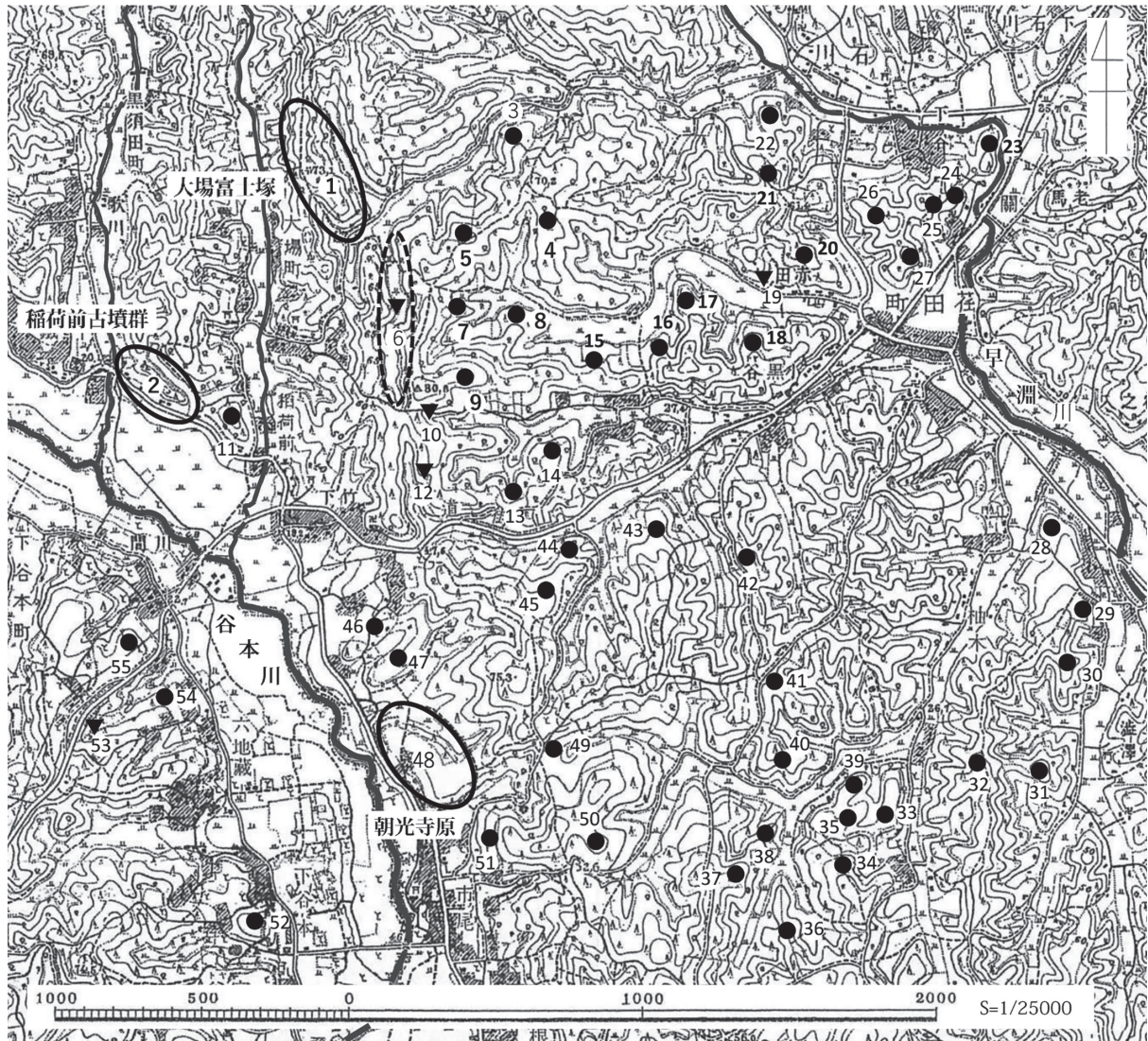
周知のように、朝光寺原式は横浜市青葉区朝光寺原遺跡の調査成果として提唱された（岡本・武井 1969）。以後半世紀の資料充実に基づく研究の進展により、今日では揺るぎない位置を占めている（浜田 2009）。にもかかわらず報告書が未刊行のため、予告された基準資料（B 区 510 号住居址出土土器）の全容公開に至らず、土器研究上の空白となっていた（渡辺 1995）。

しかるに、坂本が神奈川県立歴史博物館の高津眞亮資料を調査した際、その中に大熊宮原遺跡出土の櫛描文台付甕が含まれているのを確認した（坂本 2021a）。朝光寺原式提唱時に「かかる例は樽式に見出せない」と特記され、型式区分の目安となった基準資料の一つである。『横浜市史』に写真が掲載されていたが（岡本 1958）、以後の研究の中でも言及されることは全くなかった。

これを端緒として、「荏田式」（下作延・ヤカマス台・小黑谷出土例）、鹿ヶ谷遺跡 8 号住居址出土土器、朝光寺原遺跡 B 区 510 号住居址出土土器の存在を確認、図化・公表の必要性を改めて痛感した（坂本・宮田 2021b）。

そうした観点から、2021 年には横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターにて、朝光寺原遺跡 A～C 区の朝光寺原式関連資料の調査・図化を行った。これによって初めて、基準資料たる B 区 510 号住居址出土土器の全体像を把握し、提示することができた。併せて実測可能な弥生後期の主要土器についても報告した。

この調査の中で、三殿台遺跡出土の櫛描文関係土器を見出したので、三殿台考古館にて資料調査を行った。その結果、これまで「ない」とされてきた（岡本 1986）同遺跡にも、相当量の朝光寺原式土器が存在



- | | | | | | |
|------------|---------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 大場富士塚 | 2. 稲荷前(遺跡)古墳群 | 3. あざみ野 | 4. 赤田11 | 5. 赤田14 | 6. 大場横穴墓群 |
| 7. 赤田15 | 8. 赤田12 | 9. 小黒谷・赤田17 | 10. 小黒谷横穴墓群 | 11. 寺下 | 12. 市ヶ尾横穴墓群 |
| 13. 小黒谷IV | 14. 小黒谷V | 15. 赤田10 | 16. 赤田2 | 17. 赤田1 | 18. 赤田3 |
| 19. 赤田横穴墓群 | 20. 赤田7・8 | 21. 赤田6 | 22. 道明台 | 23. 関耕地 | 24. 観福寺北 |
| 25. 観福寺裏 | 26. 釈迦堂 | 27. 虚空蔵山古墳 | 28. 矢崎山西 | 29. 矢崎山 | 30. 矢崎山古墳 |
| 31. 荇田45 | 32. 荇田44 | 33. 華蔵台 | 34. 荇田2 | 35. 荇田25 | 36. 荇田9 |
| 37. 荇田17 | 38. 荇田59 | 39. 荇田1 | 40. 荇田19 | 41. 荇田21 | 42. 拝堂 |
| 43. 長者原 | 44. 長谷 | 45. 中野原 | 46. 鹿ヶ谷 | 47. 寺中ノ原 | 48. 朝光寺原 |
| 49. 細谷台 | 50. 亀ノ子台 | 51. 中里 | 52. 馬場台 | 53. 上谷本横穴墓群 | |
| 54. 上谷本IIA | 55. 上谷本IIB | | | | |

第1図 大場富士塚遺跡の位置と周辺の遺跡（上図は1947年；荇田）

することを明らかにすることができた。両遺跡の資料を検討すると、朝光寺原式土器は、北関東櫛描波状文土器とのつながりが深いと考えられた（坂本・宮田 2022a）。なお、下作延例については、現在再検討を進めている。

以上の内容について、2022年7月、朝光寺原式研究者として知られる渡辺努氏（現（株）アーク・フィールドワークシステム）と意見交換をした際、横浜市青葉区大場富士塚遺跡のことが話題となった。同遺跡は1982～83年に日本窯業史研究所が調査を行い、弥生後期の集落址を全掘し、水神平式土器なども出土しているが、これまで概要と一部の資料が知られていたに過ぎない（水野・渡辺 1983、緑区史編集委員会 1986、

谷口 1991a・b、渡辺 2015)。当時、同研究所員として発掘調査にあたった渡辺氏は、朝光寺原式土器も多数出土したと教えてくれた。また、整理作業も進めて、図版原図・原稿類も作成済みであると語った。

渡辺氏のご教示に基づき、2022 年 12 月 15 日、栃木県那珂川町の日本窯業史研究所にて、大場富士塚遺跡の資料熟覧を行った。調査研究部長の水野順敏氏は同遺跡の調査者でもあり、主要な資料を実見することができた。出土した朝光寺原式土器には、周辺他地域に見られない独自性が存在しており、広く紹介すべき内容と判断した。水野氏は、「未報告であることに強い責任感を感じている」としたうえで、少しでも早い公表の意義を認め、報告用図版原図の一部使用を許可していただいた。

以上の経緯から、小文は大場富士塚遺跡の朝光寺原式土器の様相を紹介することに主眼を置いた限定的なものとした。ただし、類例の少ない水神平式系土器については、公表を望む渡辺氏の意向を受け、併せて紹介することとした。

以上のように小文は、日本窯業史研究所、水野順敏・渡辺努両氏のご高配・ご教示によって実現したものであり、各位に厚くお礼を申し上げる。

小文のうち、はじめに、1、4、おわりに、を坂本が、2、3、5、を宮田が担当した。第 2～9・15 図の原図は、日本窯業史研究所の提供によるもので、修正と組み直し（改変）に当たっては宮田が行った。

1. 大場富士塚遺跡の弥生後期集落址について（第 1・2 図）

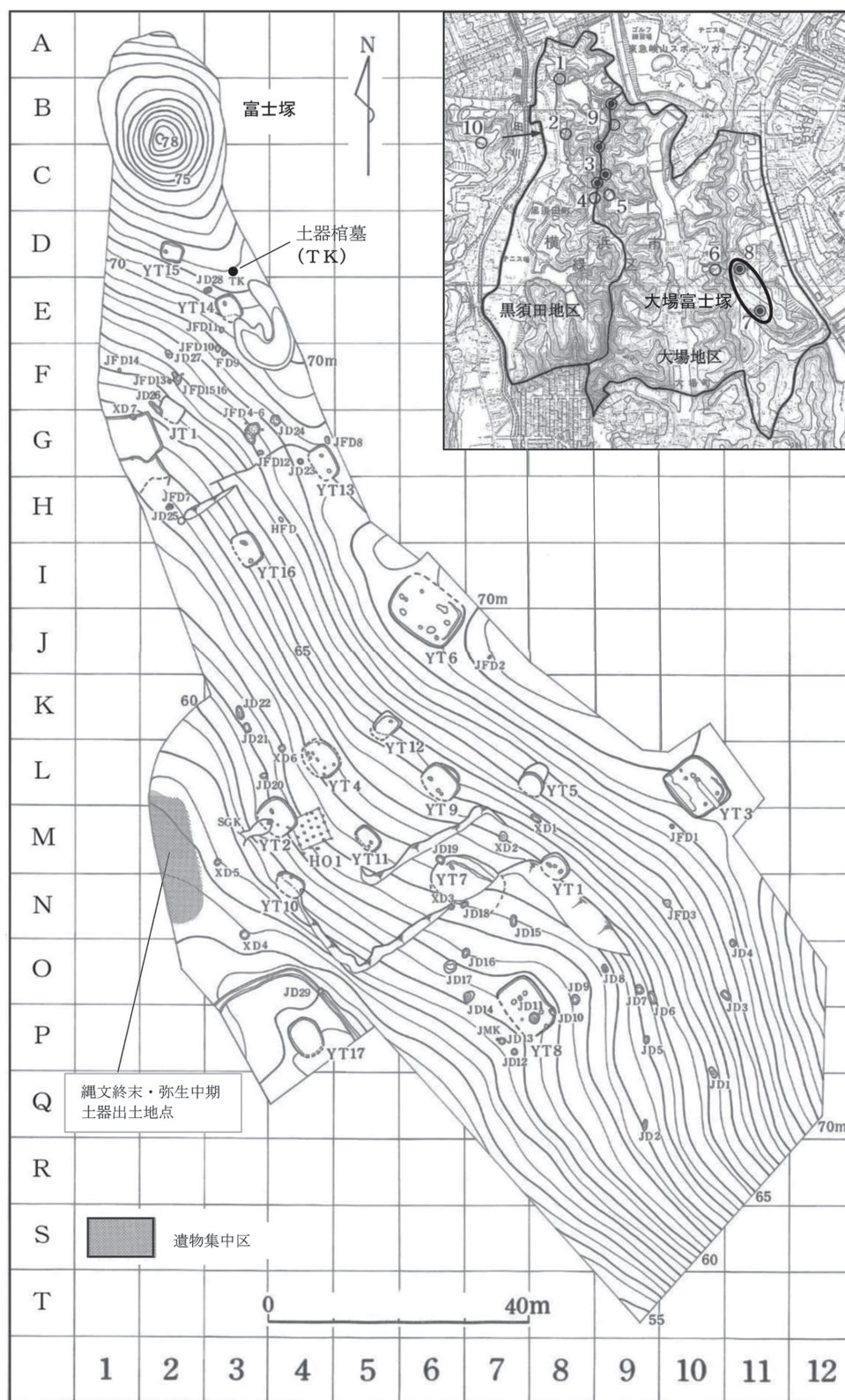
大場富士塚遺跡（青葉区 114）は、現東急田園都市線あざみ野駅西方約 1.5km、大場富士塚公園の南方付近に位置する。鶴見川上流の谷本川は、青葉区市ヶ尾付近で南東流し、北から流入する大場川の東岸には狭隘な多摩丘陵の主脈が南下し、東方から早淵川の支谷が深く入り込んでいる。大場富士塚遺跡は、早淵川上流の石川から西方へ延びる大場谷の源流部へ、主脈から突出した丘陵性台地と西側支谷内に立地している（第 1 図）。

周辺は弥生後期、朝光寺原式土器を出土する遺跡が多く分布している。南東に赤田谷・小黒谷遺跡群、東方に閑耕地・矢崎山遺跡、南方に長者原・朝光寺原・寺中ノ原・上谷本Ⅱ遺跡などである。また南側に向かい合う支谷には大場横穴墓群、さらに市ヶ尾横穴墓群、南西に稲荷前古墳群が分布する。

調査は黒須田・大場地区の開発に伴い、日本窯業史研究所が 1982～83 年に発掘調査を行った。当初、富士塚（第 2 図 8）と集落地区（同 7）を分けていたが、本調査時に「大場・富士塚」となった（小文では「大場富士塚」と表記する）。調査結果は概報で比較的詳しく紹介されているので（大川ほか 1983）、それに基づいて記述する。

遺跡は標高 72～73 m の台地上から標高 56 m の南西支谷におよび、長さ 210 m、最大幅 90m で、調査面積は 12,700㎡に達する。発見遺構は縄文時代が住居址・土壇、古代が火葬墓、近世～近代が富士塚・炭窯などであった。以下は弥生時代について記述する。

住居址（YT）17 軒は、台地上平坦面・斜面・支谷部にわたるが、台地東側は急斜面のため存在は困難と考えられ、発見遺構は集落址の全部とみられる。分布の最大の特徴は、竪穴住居址の主軸が等高線に沿い、全く重複がないことである。10 m 前後の大型 2 軒（YT3・6 号）が平坦面端に離れて位置し、そこから見下ろせる斜面から支谷部にかけて 11 軒が集中し、やや大型の 2 軒（YT7・8 号）が含まれている。北半部の斜面上に小型の 3 軒があり、1 軒は斜面中である。平面形は隅丸長方形と楕円形で、いずれも周溝がなく、柱穴は YT8・13 号のみである。地床炉は 8 軒にあり、ほとんど軸線上の北西寄りに位置する。大型の



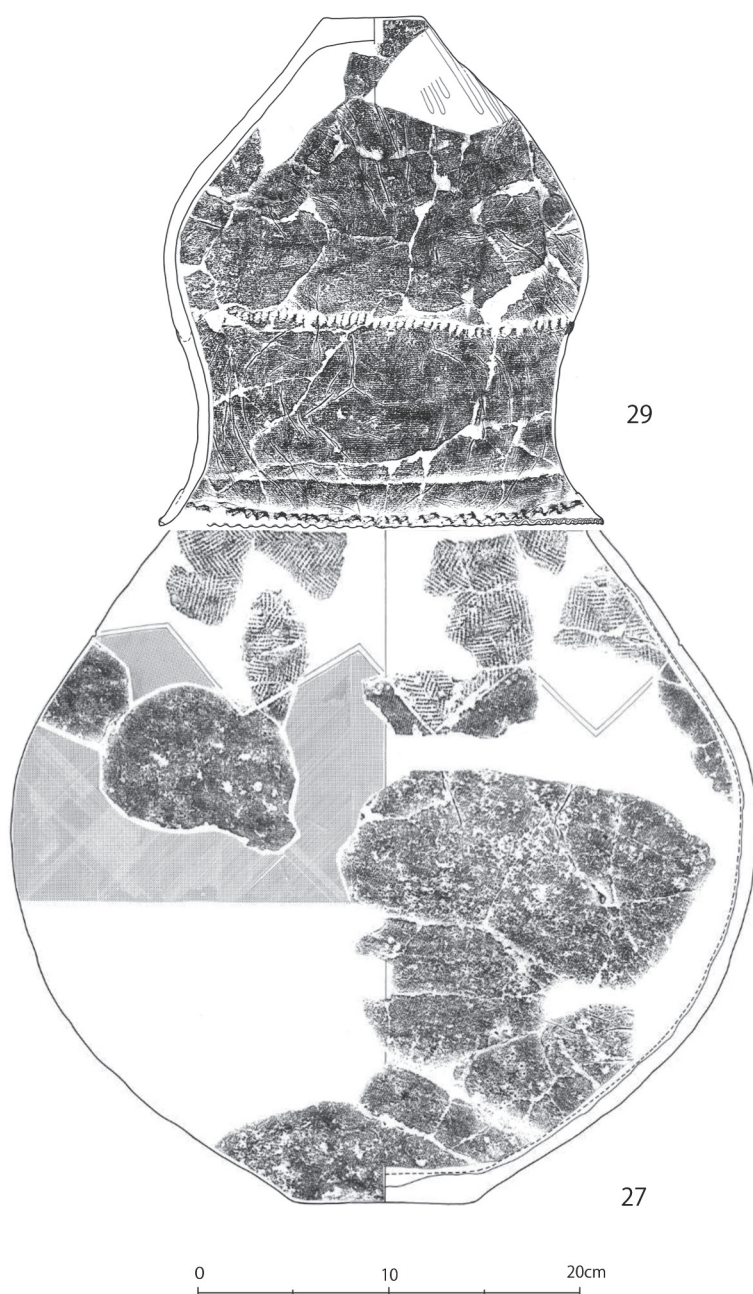
第2図 大場富士塚遺跡遺構分布図

YT1号からは朝光寺原式、土製勾玉と共に多量の炭化米が検出された。完形粒は474粒あり、95%が短粒で同一品種に属すると考えられ、極小粒が主体で日本型を呈し、南関東久ヶ原粒に極めて近い様相を示す、という（佐藤 1983）。

YT3・6・7号にはベッド状遺構があり、YT1・14・15号は焼失家屋である（第2図）。

ここで、第3～8図にかかげた土器の出土位置を遺構別に記しておく。YT5号（1・6・13）、YT7号（3・4・5）、YT8号（19）、YT9号（18・20・21）、YT11号（33）、YT12号（17）、YT13号（32）、YT15号（2・7・16・24・25・26・28）、YT17号（8・10・12・30・31）、TK土器棺（27・29）、地区内（9・14・15・22・23）。

最も多数の土器が出土している15号は集落の北端に位置し、地床炉はあるが柱穴のない焼失家屋である。この類例として、都筑区北川貝塚のY1号住居址があげられる。同住居址も集落のはずれに位置し、有炉・無柱穴の火災住居で、多数の完形土器が出土した（坂本ほか 2007）。住居址の構造は他とさして変わらないが、倉庫的な性格を有していたとも考えられる（第2図）。特徴的な遺物として、小型の



第3図 土器棺

また、小型の YT10 号からは、北川谷 3 期新段階の壺、朝光寺原式Ⅲ期段階の甕、遠江・駿河第 V 様式 5 - 3 期後半段階の高杯に伴って、面径 5.7cm の小型倣製鏡（内行花文日光鏡系倣製鏡第Ⅱ型 b 類）が出土した。渡辺は、この鏡が「東日本で最も旧く」、「朝光寺原式土器を含む中部高地系土器分布圏」のネットワークの中で、「朝光寺原式土器集団も重要な役割を担っていた」と評価している（渡辺 2015）。

土器棺墓（TK）は YT14 号の北 2.5m に位置し、径 50cm・深さ 30cm の掘込み中に壺 27 が正位で納められ、平甕 29 が逆位で上蓋となっていた（第 3 図）。27 は胴部最大径が 39cm で、口縁～頸部が打ちかけられ、肩部に羽状細縄文が施され、下端は山形沈線で区画し、以下は赤彩されている。29 は外反する口縁部に押捺を施し、膨らむ胴部やや上の接合帯に刻目文が加えられている。人骨・副葬品は発見されなかった（第 7・8 図）。

集落の時期的変遷について、朝光寺原式土器を 5 期区分する渡辺は、Ⅰ・Ⅴ期は認められず、Ⅱ古期（YT1・8 号）、Ⅱ新时期（YT3・5・10・12・15 号）、Ⅲ期（YT2・4・9・13・16・17 号）、これに YT14 号も含まれる可能性

性を考えている（渡辺氏教示）。最大の YT6 号は不明だが、仮にⅢ期を仮定すれば、集落は南方から大型住居址を中心として集落形成が始まり、増大しながら次第に北方へ広がっていく、という見方もできよう。

以上に見る集落構成は、南方 1km 弱に位置し、周辺地域最大級の後期集落である小黑谷（小黑谷Ⅰ・Ⅱ・赤田遺跡群 No. 17）遺跡に相通じる点が認められる。（上野・池上 1973、渡辺 1998）。そこでは、土製勾玉をはじめとする土製品も多く、集落の一特徴となっている。また、南西の稲荷前古墳群でも、下層の弥生集落から土鐸・土製勾玉が出土している（緑区史編集委員会 1986）。これら 3 集落の分布域に初期古墳（稲荷前 16 号墳）が成立することから、他の 2 遺跡と共に大場富士塚遺跡の性格と、果たした役割をさらに検討して行く必要がある。

2. 大場富士塚遺跡の弥生後期土器（第4～8図）

出土土器の時期区分については、本遺跡と近接する赤田遺跡群の報告において、渡辺努が朝光寺原（様）式土器の5期編年（Ⅰ～Ⅴ期）を行っている（渡辺 1994・1998）。その後渡辺がⅡ期とⅢ期を2分（古・新）しており、小文では赤田編年（Ⅱ古・新期、Ⅲ古・新期を含む）に概ね準拠して表記することとする。久ヶ原式・弥生町式・前野町式については、研究者間で共通の認識が得られていないと判断されるため、東京湾岸系土器として表記する。器形と波状文の類型については、「朝光寺原式土器の根源的研究」（坂本・宮田 2022）に準拠するが、特に器形については、朝光寺原遺跡には見られない類型が存在する。

（1）朝光寺原式櫛描波状文系土器（第4・5図）

1は、大型の甕であり、器形は朝光寺原（以下、「朝」と略す。）壺形甕2類に当たる。残存器高40.4cmを有する。胴部に最大径を持ち29.3cmを測る。頸部中位に簾状文を巡らせ、その上下に櫛描波状文朝光寺原（以下、「朝」と略す。）Ⅰ類に近似する波状文を巡らせている。胴部には刷毛目調整が行われ、その後棒状ミガキを加えており、朝光寺原式基本資料（510号住）と同様の手法が見られる。頸部の窄まりはやや弱く、やや長くなっている。赤田Ⅱ新期に比定できよう。

2は器形が朝広口甕3類に当たり、頸部に朝Ⅱa類の波状文を2段巡らせている。頸部は短いが屈曲は弱くなっている。胴部の張りはやや算盤玉状を呈する。器形的には古様相を示すが、頸部波状文の様相から赤田Ⅲ期新～Ⅳ期に当たると考えられる。

3・5は、器形が朝広口甕3類である。頸部に朝Ⅰ類の波状文を巡らし、口縁部は無文帯となる。4は、器形が朝壺形甕2類となる。頸部に朝b類の波状文がある。3には、刷毛目調整後に横方向のヘラナデ調整で仕上げている。

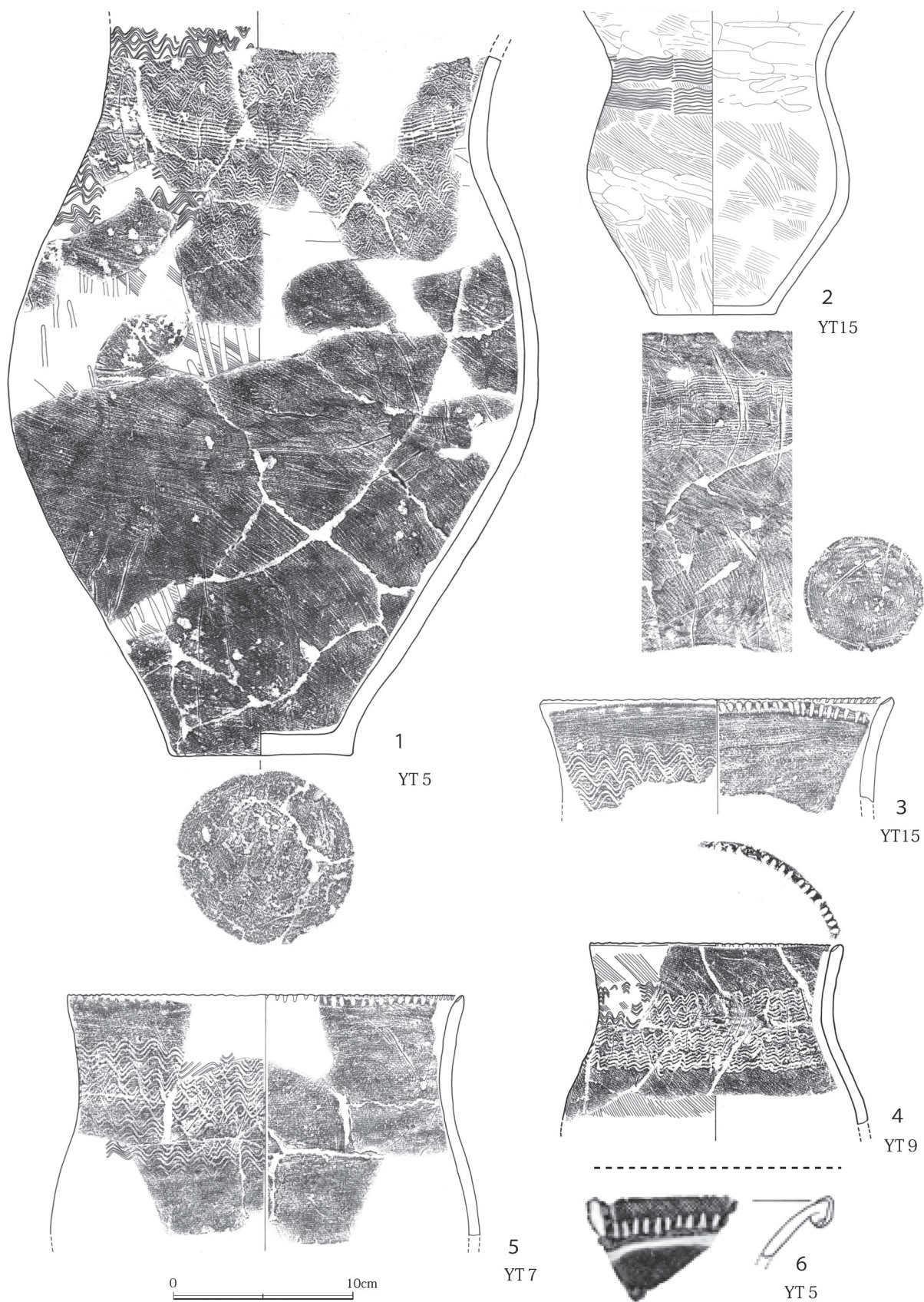
3～5には、口縁上端部の刻目文が内側に施されているのが特徴であり、朝光寺原遺跡では見られない手法である。赤田Ⅲ期新～Ⅳ期に当たると考えられる。

6は、東京湾岸系折返口縁の壺形土器破片である。口縁には斜行縄文（RL）を施し、刻目文を有する棒状貼付文を加飾している。段差を有する口縁下端には刻目文を巡らせている。赤田Ⅱ新期に並行すると思われる。

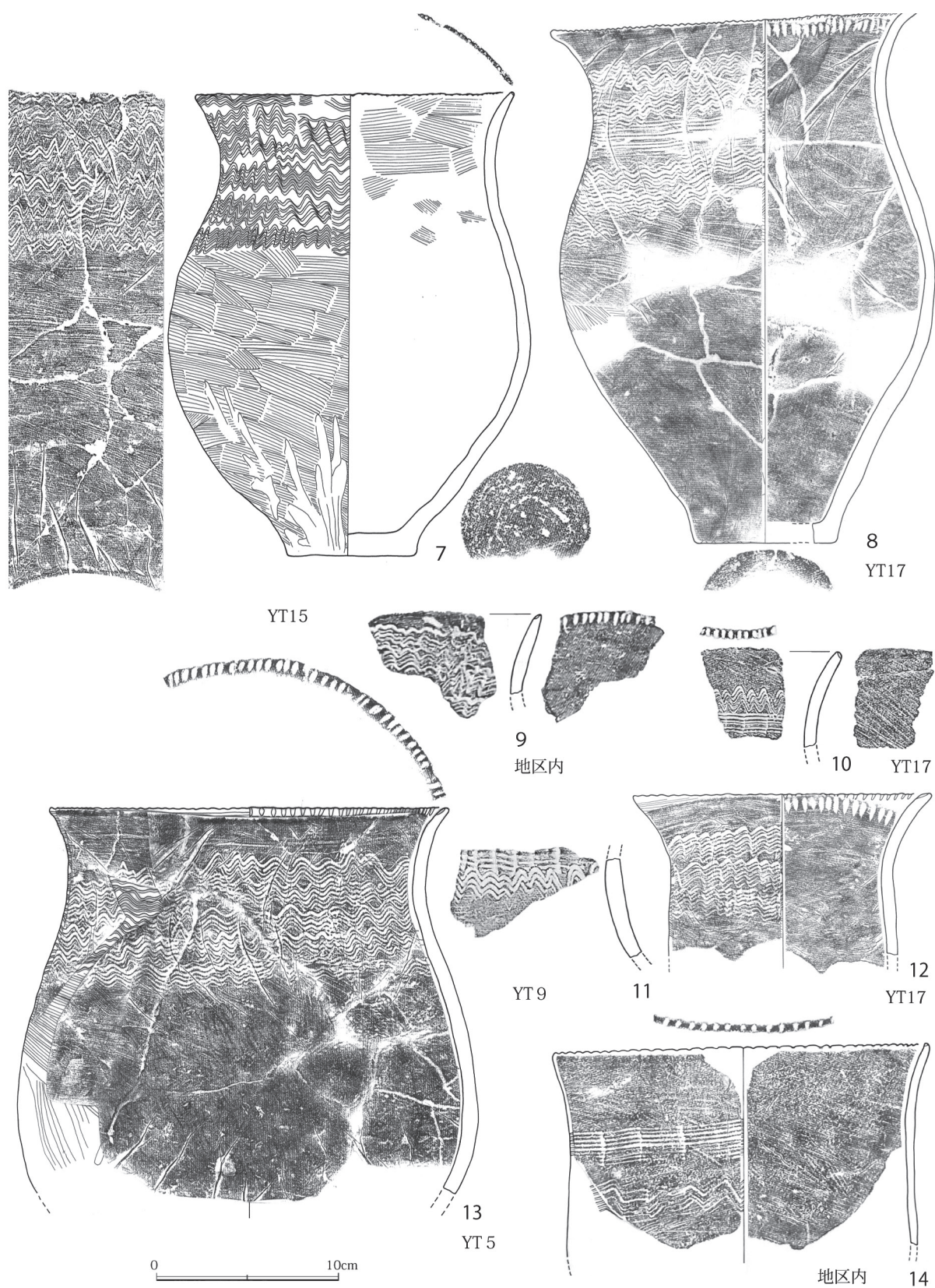
7・8・13は朝広口甕3類に当たり、胴部最大径より口径が小さくなっている。頸部がやや短く、口辺が外反するものである。胴部の膨らみも明瞭である。外面には刷毛目調整後に棒状ミガキを施している。8の内面には、刷毛目調整後のヘラナデ調整がある。7には、朝Ⅰ類の波状文が口縁上端まで施されている。8は頸部に簾状文、その上下に朝Ⅱb類の波状文を巡らし、口縁部には無文帯を残す。簾状文には止めが明確でない。13も頸部に朝Ⅱb類の波状文を施している。8・13は、3～5と同様に口縁上端内側に刻目文を巡らせるものである。また、7・8・13は、新しい様相を示しつつも、概ね赤田Ⅱ新期の範疇に含められると思われる。

12は、口縁が逆「ハ」の字状に外反するものの、頸部から胴部にかけての膨らみが極僅かでそのまま垂下する「T」字状の器形を呈する。朝光寺原遺跡出土土器においては見られない器形である。頸部には朝Ⅱb類の波状文が3段巡る。口縁の刻目文は上端内側に巡っている。頸部波状文に簡略化を感じるが、口辺部の外反は強く、赤田Ⅱ新期～Ⅲ期の古い段階に比定されよう。

14は、頸部の窄まりが弱く胴部の膨らみも少ない甕である。頸部に簾状文巡らせ、その下のみに三殿台（以下、「三」と略す。）Ⅰc類の波状文を巡らせている。同様の器形は朝光寺原遺跡504a住居址に見られ



第4図 大場富士塚遺跡出土土器 (1) 一櫛描波状文系土器 (1) ; YT5・7・9・15 -



第5図 大場富士塚遺跡出土土器(2) 一櫛描波状文系土器(2) ; YT5・9・15・17 -

る。赤田Ⅳ期に比定できよう。

15 は、頸部が窄まり、胴部は膨らみ口径を上回る。肩部には波状文三 I b 類が巡っている。口縁部には広く無文帯を残している。口縁上端の刻目文は内側に施されている。赤田Ⅱ新期に比定できよう。

口縁上端の内側に刻目文をもつ土器は、3 (YT15)・4 (YT9)・5 (YT7)・8 (YT17)・9 (地区内)・12 (YT17)・13 (YT5)・15 (地区内) において認められた。

(2) 朝光寺原式無文系土器 (第 6 図)

16 は、器形が朝壺形甕 2 類である。口辺は垂直的に立ち上がり上端部が弱く外反する。口径は胴部最大径より小さい。器壁外面調整は、刷毛目調整後にヘラナデを加え、棒状ミガキを施している。底部に顕著である。内面は刷毛目を残している。赤田Ⅱ新期の範疇に含めておきたい。

17 は、朝広口甕 3 類に当たる。刷毛目調整後に斜行するヘラナデを施している。口唇下には横方向のヘラナデが見られる。頸部の窄まりがやや弱くなるが、最短径が上位にあり赤田Ⅱ新期に比定できる。

19 は、朝広口甕 7 類の器形に当たる。底部から逆「ハ」の字状に広がり、頸部はあまり窄まらず口縁に至る。口縁端部は僅かに内湾を示す。口縁に最大径がある。器壁外面にはやや目の深い刷毛目調整痕を止める。赤田Ⅱ古期の範疇としておきたい。

20 は、胴部の張りが弱く頸部もほとんど窄まらない。頸部は短く極僅かに外反する。筒状に近い形状であるが、朝広口甕 7 類の範疇に含めておきたい。赤田Ⅲ期に比定できる。

17 (YT12)・18 (YT9)・21 (YT9)・22 (地区内)・23 (地区内) は、15 と同様に口縁上端内側に刻目文を施す一群である。これらの内、23 が赤田Ⅱ期に含まれると思われるが、他は赤田Ⅲ期であろう。

(3) 東京湾岸系壺形土器および鉢形土器 (第 7 図)

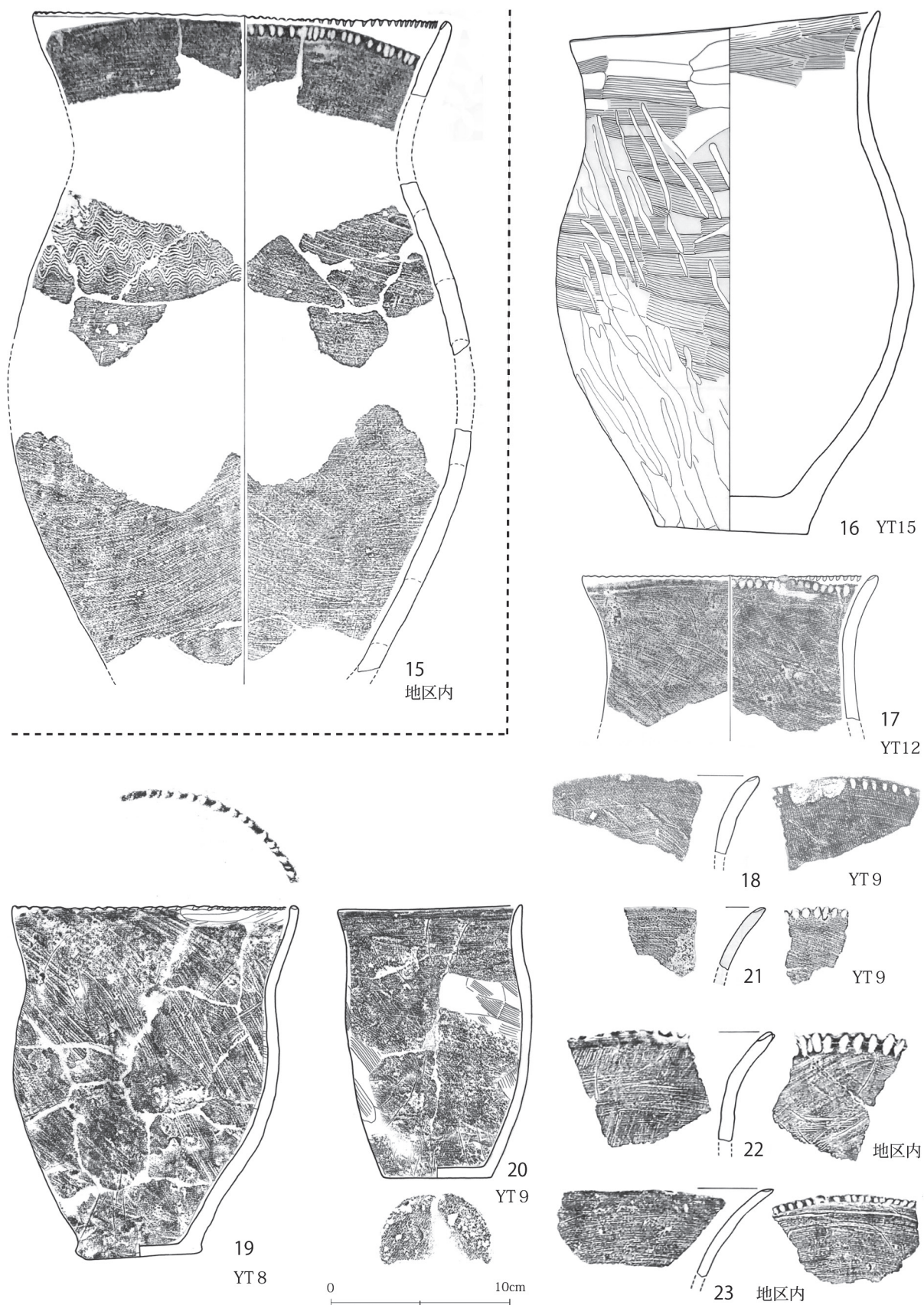
24～26・28 は同一住居址 (YT15) 出土土器である。24 は有段口縁を呈し、頸部は細く窄まり、口縁部は開かず僅かに外湾しながら垂直的に立ち上がる特徴を示す。口縁部には斜行縄文 (RL) が施文され、幅 4.6cm と広い縄文帯である。縄文帯下端には縄文原体押捺による刻目文が一巡している。頸部最短径位置には、沈線による横帯区画を施し、沈線下に縄文帯を配する。頸部無文部と内面に赤彩を施している。25 は、頸部過半から胴部上半にかけて沈線と「S」字状結束文による横帯区画を行い、無文帯と羽状縄文帯を交互に配するものである。中にも羽状縄文帯の中にも「S」字状結束文が見られる。無文帯には赤彩を施している。27 は、口頸部を欠き、欠損部の口を 29 が逆位で塞ぎ、土器棺として使用されていたものである。胴部が球状を呈する壺であり、新しい様相を示している。胴部最大径付近に連続山形沈線文 (鋸歯文) を巡らせ区画し、肩部に縄文を充填している。土器棺の蓋となった 29 を考慮すると、赤田Ⅱ期～Ⅲ期 (古) に並行すると思われる。

26・28 は口辺部に縄文を配する鉢である。26 は、口辺部が大きく内湾し、羽状縄文を巡らせ、その下端を刻目文で区画している。胴・底部には赤彩を施す。器形は底部から弱く内湾を示しながら逆「ハ」の字状に開き、口縁端部が内湾を強め垂直的になる。縄文帯の下端は「S」字状結節文で区画している。これらは赤田Ⅱ新期～Ⅲ期 (古) に並行すると思われる。

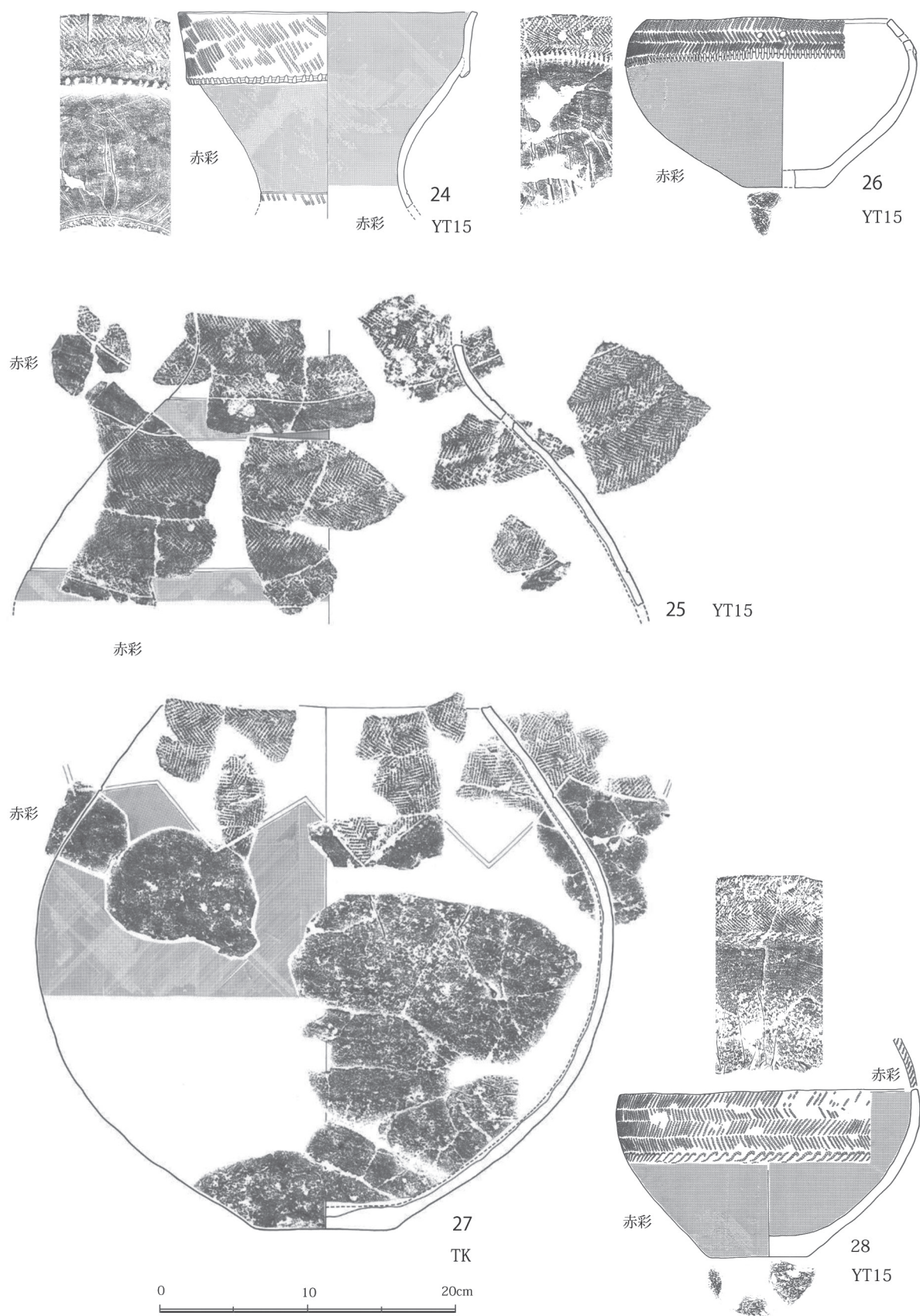
第 4 図 1 のように、大型の壺形甕が存在するが、壺や鉢については、東京湾岸系土器が使用されている点は、朝光寺原遺跡と同様である。器種・機能による使い分けが行われている可能性がある。土器棺に使用された身 (27)・蓋 (29) の双方が東京湾岸系土器であり、この意味するところに注目したい。

(4) 東京湾岸系甕形土器 (第 8 図)

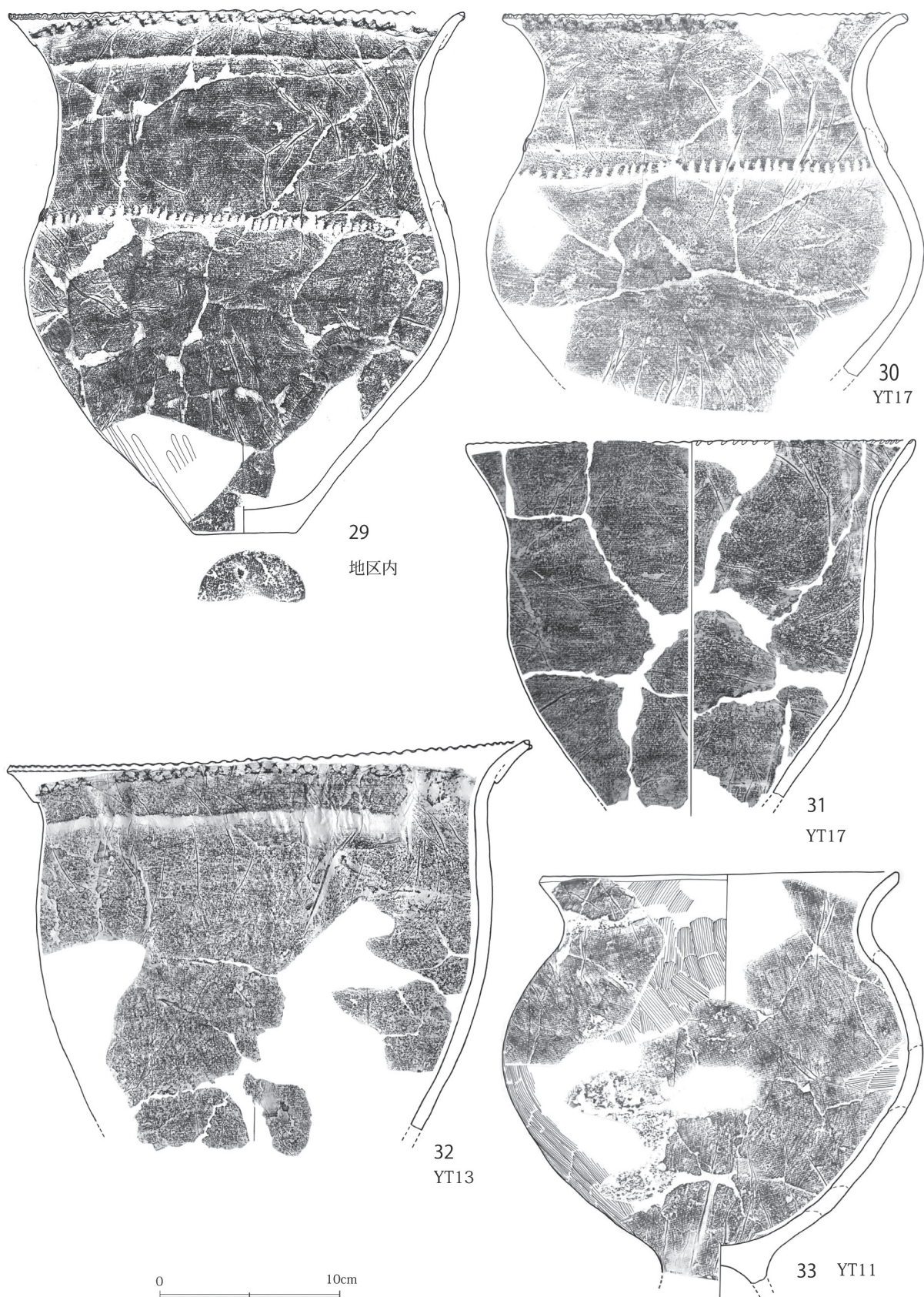
29～32 は無文の甕である。30・31 は同一住居址 (YT17) 出土である。29 は、頸部が間延びし、胴部最



第6図 大場富士塚遺跡出土土器 (3) 一無文系土器；YT8・9・12・15、地区内一



第7図 大場富士塚遺跡出土土器（4）—東京湾岸系壺形・鉢形土器；YT15、TK—



第8図 大場富士塚遺跡出土土器 (5) —東京湾岸系無文甕形土器ほか；YT11・13・17、地区内—

大径が器形中位にくる。口径が胴部最大径を上回っている。口縁は外反し、外面に最上段の輪積痕跡を残し折返口縁の様相を示す。口唇部には押圧文が巡る。頸部下端には、輪積箇所刻目文を加飾している。器壁外面には刷毛目調整後にヘラナデを施し、さらに底部には棒状ミガキを加えている。30は、29より頸部の絞りが強く、口辺部が外湾気味に開き、口縁端部が短く外反することにより、口唇部は横を向く。頸部下端の輪積箇所は肥厚し、そこに刻目文を巡らせる。器壁外面には刷毛目調整後に丁寧なヘラナデを施している。31は、器形が三殿台広口甕1類に当たる。全体的には逆「ハ」の字状に開き、口縁径が最大径となる。甲府盆地北西部地域の影響を受けた器形である。32も三殿台広口甕1類に当たる。29と同様に幅広の折返口縁を呈する。頸部がやや上位にあり、口辺も短い。赤田Ⅰ期に併行するであろう。29・30は、赤田Ⅱ新～Ⅲ期（古）に、31はⅢ期に併行すると思われる。

33は台付甕であるが台部を欠損する。頸部は短く、口辺部は「く」の字状に外反する。胴部は球状に膨らみ、最大径が体部中位よりやや上に位置する。口縁部径は胴部最大径より約10cm小さい。刷毛目調整後にヘラナデを施しているが、刷毛目を消し切れていない所を多く残す。赤田Ⅴ期（新）～終末期、及び北川谷編年（古屋2013・2014・2015）の5期古段階に比定できるとと思われる。

3. 大場富士塚遺跡の朝光寺原式土器について（第1・2表、第9～14図）

（1）大場富士塚遺跡出土土器と朝光寺原遺跡出土土器の類似点と相違点（第1表・第8図）

大場富士塚遺跡出土の朝光寺原式系土器は、赤田編年Ⅱ古期～Ⅳ期までの各期が存在する。その内、赤田Ⅱ新期～Ⅲ（古）期に比定できる土器が最も多い。それらが出土した住居址は総軒数17軒の内14軒を数える。うち図示したものでは、Ⅱ新期が5軒（YT5・12・13・15・17）、Ⅲ期（Ⅲ古・Ⅲ新期）が3軒（YT4・9・17）である（第1表）。

赤田Ⅱ古期とした壺形甕の第6図15は、完形ではないが器形復元が可能なものである。赤田Ⅱ新期とした第4図1に比して口辺が短く、開き方もやや大きくなっており、頸部の窄まりもやや強く間延びもしていない。この器形には、簾状文を巡らすものが多く、1もその例外ではない。この器形はⅢ期になると見られなくなり、朝広口甕3類や朝壺形甕2類が多くなる傾向が見られる。朝光寺原遺跡においても同様の傾向を示す。しかし第5図12のように、逆「ハ」の字状に開いた口辺から、胴部に僅かしか張りを持たずに垂下する器形は、朝光寺原遺跡においては見られないものであり、大場富士塚遺跡の特徴の一つである。

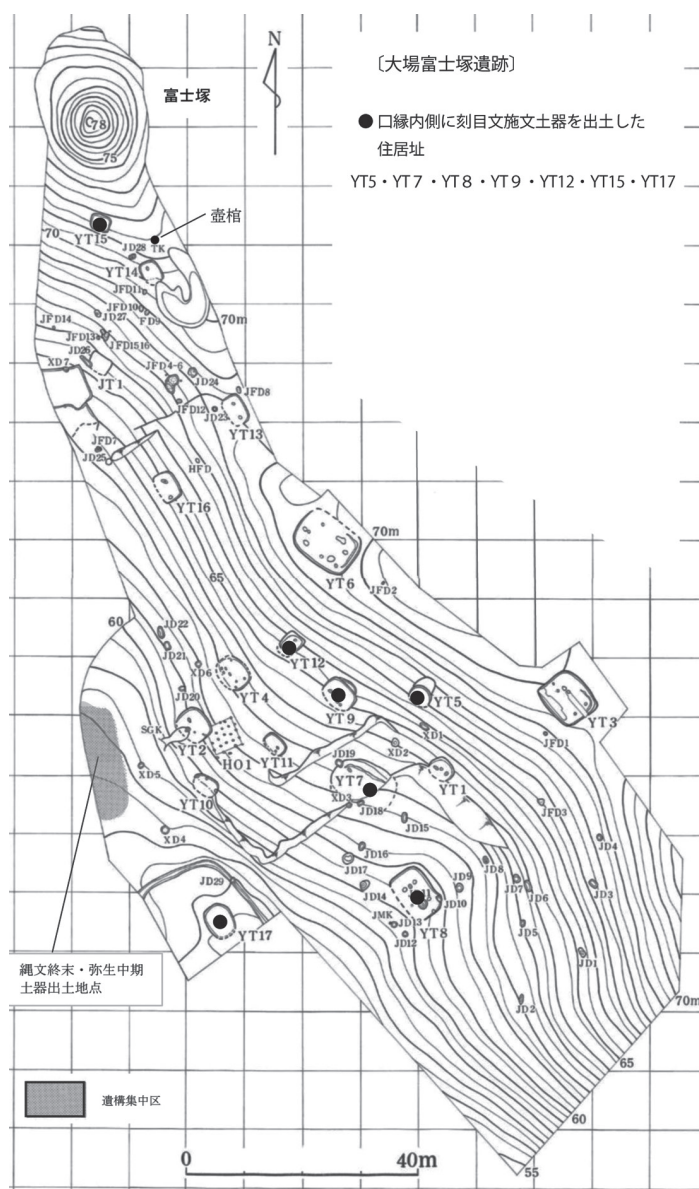
第1表 大場富士塚遺跡における朝光寺原式土器系土器の
出土住居址・出土土器の時期区分相関表

（表中の数字は、第4～8図中の土器番号を示す）

	I 期	Ⅱ古期	Ⅱ新期	Ⅲ 期	Ⅳ 期	Ⅴ 期	終末期
YT1号住							
YT2号住							
YT3号住							
YT4号住				4			
YT5号住			1				
YT6号住							
YT7号住					5		
YT8号住		19					
YT9号住				11・18・20・21			
YT10号住							
YT11号住							
YT12号住			17				
YT13号住			13				
YT14号住							
YT15号住			2・3・7・16				
YT16号住							
Yt17号住			8・10	12			
地区内			9・15	22・23	14		

た第4図1に比して口辺が短く、開き方もやや大きくなっており、頸部の窄まりもやや強く間延びもしていない。この器形には、簾状文を巡らすものが多く、1もその例外ではない。この器形はⅢ期になると見られなくなり、朝広口甕3類や朝壺形甕2類が多くなる傾向が見られる。朝光寺原遺跡においても同様の傾向を示す。しかし第5図12のように、逆「ハ」の字状に開いた口辺から、胴部に僅かしか張りを持たずに垂下する器形は、朝光寺原遺跡においては見られないものであり、大場富士塚遺跡の特徴の一つである。

櫛描波状文においては、朝光寺原Ⅱb類が最も多く、次いで同Ⅰ類、同Ⅱa類が見られる。朝光寺原式遺跡と波形や振幅に



第9図 大場富士塚遺跡における口縁内面に刻目文施文土器を出土した住居址

類似性が高いと言える。

- また、口縁上端の刻目文を内側に施文する手法も特徴の一つであり、赤田Ⅱ新时期から出現し、同Ⅳ期まで見られる。Ⅳ期比定土器のとりえ方によっては終末期まで継承される手法のようである。器種に特別な限定あるとまでは言えないが、朝壺形甕2類に多い傾向を示している。
- 出土住居址別に土器を見ると、YT5 (13: Ⅱ新时期)、YT7 (5: Ⅳ期)、YT8 (19)、YT9 (4・18・21: Ⅲ期)、YT12 (17: Ⅱ新时期)、YT15 (3: Ⅱ新时期)、YT17 (12: Ⅱ新时期)となる。YT15は調査区北群の北端に位置し、YT17は南群の西端(谷部)に位置しており、いずれの住居址も住居址群(集落)の外れに位置しているという点は、住居址の性格を示していることが考えられる。一方、YT5・YT7・YT9・YT12は南群の東半部に固まって存在し、グループ化して存在する点は前者とは在り方を異にしている。しかもこのグループには大型住居址(YT7)が存在している。しかし、大型住居址であるYT3(Ⅱ新时期)やYT6(時期不明)とは異なり、尾根部ではなく住居構築には良地とは言えない斜面に構築されている。住居址群の中において、中核となる住居址が存在しているにもかかわらず、尾根部に占地するグループとは異なっている。このことは、集落内における何らかの階層差が存在したことを想定すること

ができる。さらに言及すれば、平坦面には一般的な中・小型の住居址が検出されておらず、グループ間の階層差ではなく、本集落全体に関わる階層差と見ることも可能である。それは、集落南端の斜面に占地する大型住居址YT8(Ⅱ古期)がその鍵を握っていると考えられる。

(2) 大場富士塚遺跡出土土器と赤田遺跡群出土土器との比較(第2表、第10～13図)

赤田遺跡群は、早淵川の支流が刻んだ赤田谷を取り巻くように形成された遺跡群であり、谷は本流の早淵川から西へ深く入り込み、最奥部は大場富士塚遺跡の南南東500m付近にまで及んでいる。赤田遺跡群No.15・17遺跡とは300m余りと近接しており、大場富士塚遺跡出土土器と赤田遺跡群出土土器との比較を行ってみたい。

なお、出土土器の時期区分については、報文による住居址の時期区分に当てはめて使用しており、若干の誤差を含んでいると思われる。

赤田遺跡群出土土器数は量的に多く、その時期は赤田Ⅰ期からⅤ期まで存在し、赤田Ⅲ期・Ⅳ期が主体と

第2表 赤田遺跡群における住居址（集落）形成の時期

時 期	No. 1 遺跡	No. 2 遺跡	No. 6 遺跡	No.10遺跡	No.14遺跡	No.15遺跡	No.17遺跡
赤田Ⅰ期	●						
赤田Ⅱ期	↓						
赤田Ⅲ期			●	●	●		●
赤田Ⅳ期		●	↓	↓	⋮	●	↓
赤田Ⅴ期			↓		↓		

なっている。住居址数や土器出土量において、Ⅲ期がⅣ期を若干上回っており、Ⅲ期にピークがあったと言える。赤田Ⅱ新期・Ⅲ期が主体となる大場富士塚遺跡とは、最盛期が1時期下ることになる。

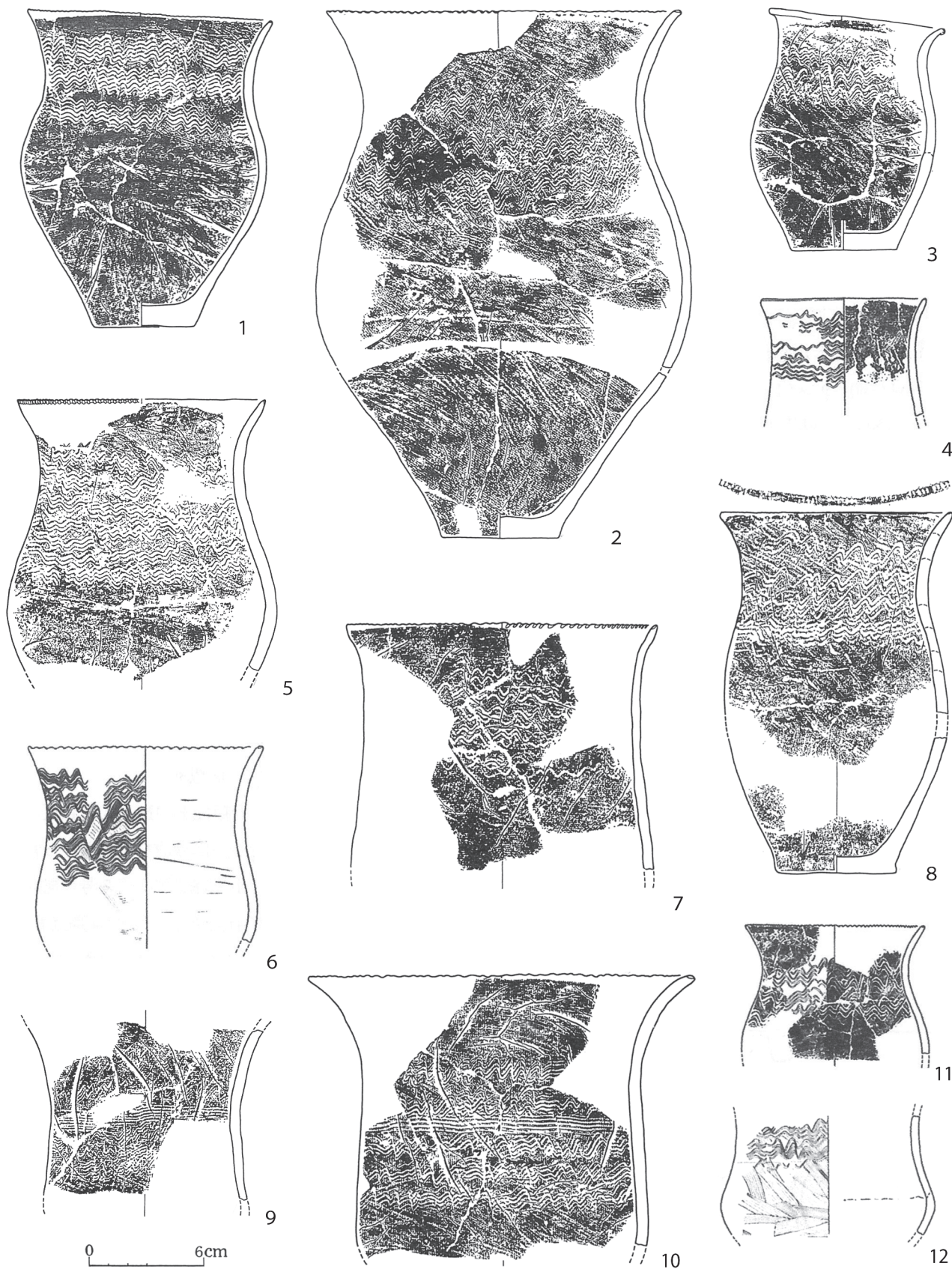
器形は、朝広口甕3類（第10・11図1・5・19）・朝広口甕8類（第10・11図2・6・11・14）・朝壺形甕1類（第10図8）などが存在する。赤田Ⅳ期には、頸部の窄まりと胴部の張りが弱くなるものが目立ち、頸部が間延びした感を呈してくる。大場富士塚遺跡に存在した、胴部の張りが少ない寸胴から口辺部が逆「ハ」の字状に大きく開く器形がNo.10遺跡YT4（第10図9・10）に存在している。また、第10図20は頸部が「く」の字状に屈曲し、胴部が算盤玉状を呈するものであり、赤田Ⅳ期の住居址から出土している。この器形は、大場富士塚YT15（第4図2）に見られる類型のもので、出土住居址は赤田Ⅱ新期とされている。しかし、両者に大きな時間差はないと考えられ、今後の検討が必要であろう。いずれにしても、両遺跡に器形の上で同類系のものが存在している。

波状文においては、朝光寺原遺跡において特徴的な朝Ⅰ類（3・6・11・12～15・17）が最も多く見られ、近似性が看取できる。次いで朝Ⅱb類（2・5・10）が多く、これも朝光寺原遺跡においては多い波状文である。ほかに、朝Ⅱa類（20）、朝Ⅲ類（4）が見られる。波状文の時期別による累計差は明確には捉えられず、各時期において使用されている波状文手法であると言える。

（3）折返口縁を有する土器（第12図）

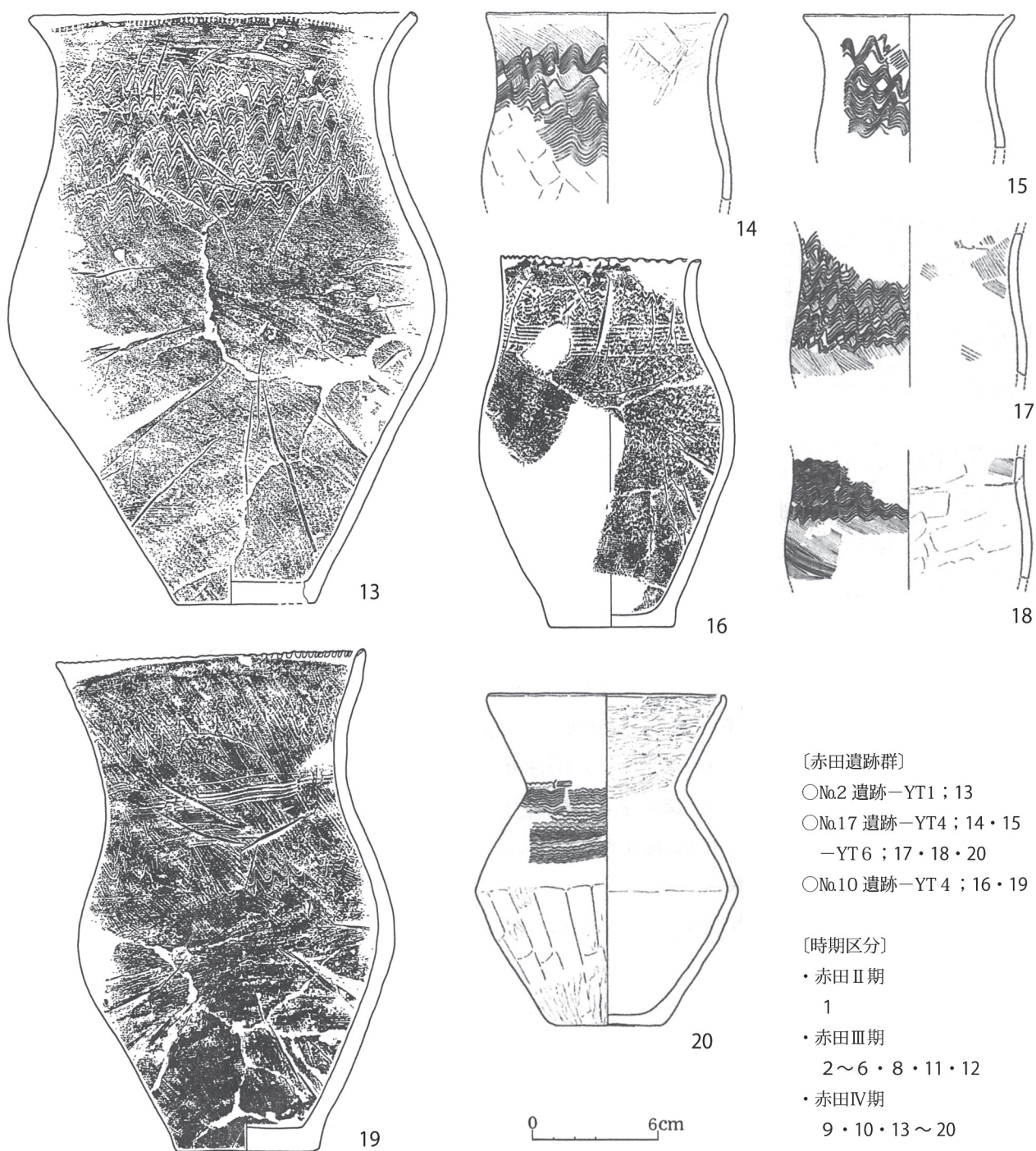
第12図は、折返口縁をもつ朝光寺原式の櫛描波状文を有するものを主に図示した。渡辺が赤田谷戸の遺跡群をA・B・Cの3群として捉えている中で（渡辺1998）、谷戸中間部A群のNo.1遺跡（YT5）・No.6遺跡（YT3）と、谷戸奥部B群のNo.10遺跡（YT1・YT3）、No.17遺跡（YT4～6）及びNo.6遺跡（YT3）において認められる。これらの遺跡は、No.6遺跡を除き赤田谷戸の南側に存在しており北側にはほとんど見られない傾向を示している。No.6遺跡の時期的な問題か、谷戸入口部C群（閑耕地・観福寺北・観福寺裏・釈迦堂）遺跡との関係か、何らかの要因があると考えられる（第13図）。

第12図1～6は、細身の壺形甕で朝壺形甕Ⅰ類に当たるものである。赤田Ⅰ期に比定されているものが多い（1・2・4・5）が、赤田終末期（6）まで存在する。1・2は、頸部に簾状文を巡らせ、上・下に櫛描波状文を加えている。3は簾状文下の方に波状文を巡らせている。4は頸部が無文となる。3・4・8は、折返口縁の下端に刻目文を加飾するものである。特に3の折返口縁は断面が三角形に突出し、口縁外面が垂直を呈しており、肥厚し突出した下端に刻目文を巡らせている。この施文手法は東京湾岸系の土器製作手法が反映されたものとして捉えることができる。6は、No.6遺跡YT3から出土したもので、東海系の甕・台付甕・壺などと伴出しており、終末期とされているものである。刷毛目調整痕を内外面ともに良く残している。7



〔赤田遺跡群〕○No.10 遺跡-YT 3 ; 1・2 / YT 4 ; 7・9・10、○No.1 遺跡-YT 5 ; 3、○No.6 遺跡-YT 6 ; 5・8、
○No.17 遺跡-YT 2 ; 4・12 / YT 9 ; 6、○No.15 遺跡-YT 3 ; 11

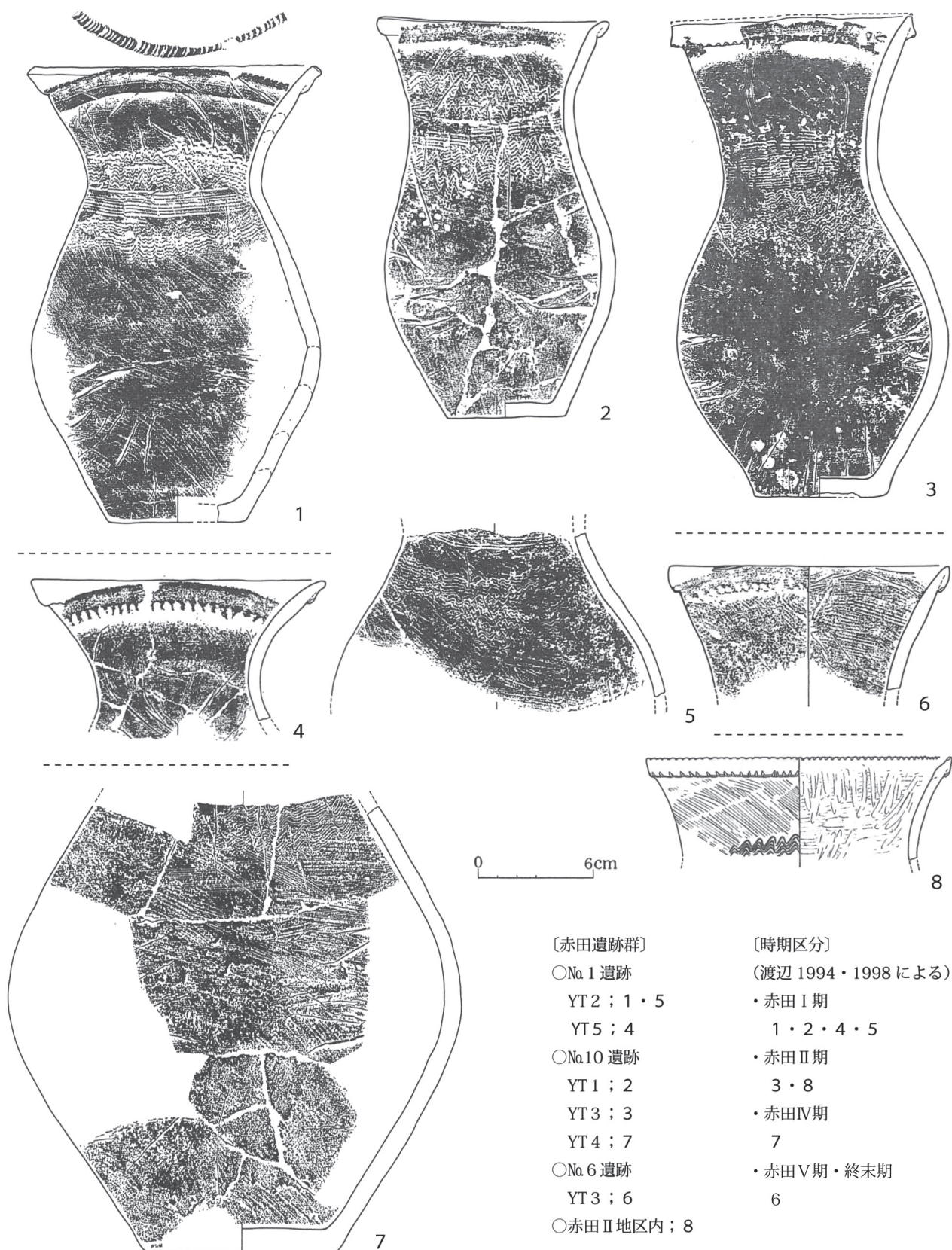
第 10 図 赤田遺跡群出土朝光寺原式櫛描波状文系甕形土器 (1) - 渡辺 1994・98 より抜粋 -



第 11 図 赤田遺跡群出土朝光寺原式櫛描波状文系甕形土器（2）－渡辺 1994・98 より抜粋－

は、口辺部が欠損する大型の壺形甕であり、頸部下半部に朝Ⅱb類の波状文が巡っている。刷毛目調整後にヘラナデを施しているが、消し切れておらず、刷毛目痕が明瞭に残っている。8は、口唇部の刻目文を内側に施すものである（第14図5と同じ）。

上記したように、折返口縁をもつ朝光寺原式土器は、東京湾岸系土器製作の伝統を受け入れた折衷様式の土器ということになる。土器製作者の出自や土器の変容過程、土器における口縁部のもつ属性（意味性）について考える上で重要である。また、第12図8のような両者の土器製作手法が一つの個体に併用され例は



第 12 図 赤田遺跡群出土の折返口縁を有する朝光寺原式土器－渡辺 1994・98 より抜粋－

少なく、特異な例として特記できる。また、第12図3のような口縁断面を持つ折返口縁も稀であり、朝光寺原式土器の中に広がりを見せない口縁である。

(4) 口縁上端内側に刻目文を施す土器 (第10・11・14図)

第10・11・14図に示した口縁上端内側に刻目文を有する土器は、渡辺が赤田谷の遺跡群をA・B・Cの3群として捉えている中で、A群のNo.1遺跡(YT2・3)と、B群のNo.10遺跡(YT4)、及びNo.17遺跡(YT4～6)において認められる。これらの遺跡は、赤田谷の南側に存在しており北側には存在していない。

また、完形資料が少なく明確とは言えないが、これらの施文手法が見られる土器は、壺形甕には少ない傾向を示している。第13図1～6に示したように、無文土器だけでなく波状文を有する土器にも存在する。

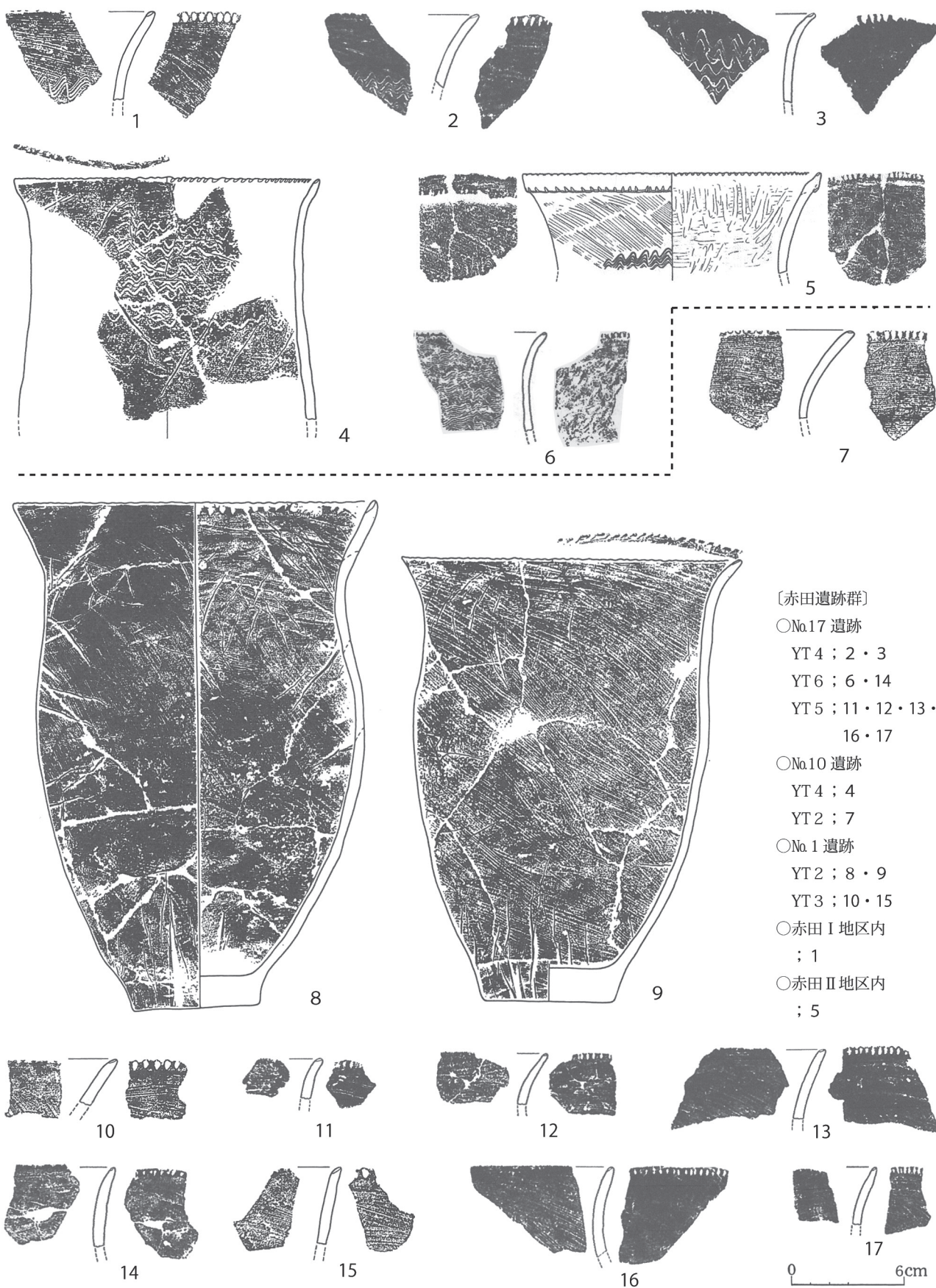
第14図5(第12図8)は、櫛描波状文を有する朝光寺原式の壺形甕であるが、口縁は折返口縁を呈し、肥厚し突出した下端に刻目文を巡らせ、口縁上端内側に刻目文を施している。前述したように、この施文手法は東京湾岸系の土器の影響が考えられるが、口縁内側の刻目文も同様に東京湾岸系壺形土器などの影響と捉えられる。



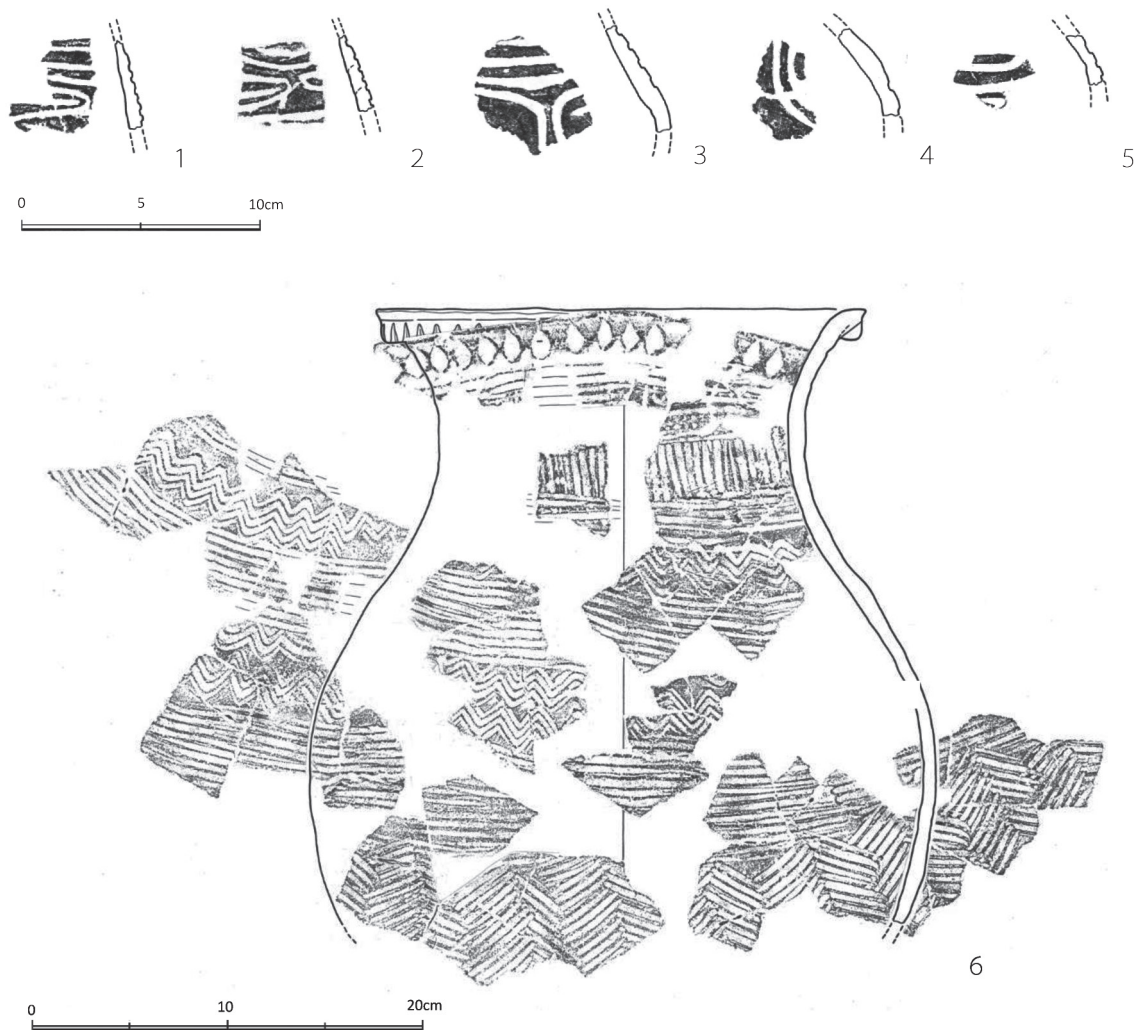
第13図 赤田遺跡群における口縁上端内側に刻目文をおよび折返口縁をもつ朝光寺原式土器を出土した遺跡分布図 - 渡辺 1998 を改変 -

4. 大場富士塚遺跡の縄文時代終末期・弥生中期土器 (第15図)

本資料は、1991年に弥生研究者の谷口 肇が発表している。谷口は資料を観察し、調査団提供の土器実測図7点を添えて紹介した(谷口 1991b)。しかし報告書未刊を顧慮して図の転載を不可としたので、これまで実質未公開の状態が続いてきた。これらは本遺跡を代表する遺物のため、今回公表することとした。



第 14 図 赤田遺跡群出土口縁上端内側に刻目文を有する朝光寺原式系土器－渡辺 1994・98 より抜粋－



第 15 図 大場富士塚遺跡出土縄文時代終末・弥生時代中期の土器実測図

第 15 図 1～6 の土器は、調査区西部の小支谷内、2-N～L 区の長さ 20 m、幅 6 m の範囲から出土した。土器の分布は調査区外にのびているが、支谷内に限られるものと考えられる。6 の破片は、比較的北半部にまとまっており、類例から「埋葬施設に関わる」とみられたが、遺構は検出されなかった。

当該時期の支谷内出土は、金沢区金沢八景駅北側遺跡が知られているものの（柳沢 1969）、遺構は不明である。類似した地形の港北区新羽浅間神社遺跡からは、弥生前期～中期の土器棺墓 3 基・土壙 1 基が検出されている（小西ほか 2013）。おそらく大場富士塚遺跡も同種性格であり、調査者の見立ては適確であったと考えられる。

1～5 は、晩期終末の工字文系土器で、荒海式（設楽 2021）に併行するものであろう。やや細目の 1・2 とやや太目の 3～5 は、それぞれ同一個体とみられる。

6 は、全体の約 4 分の 1 の破片から復元した広口壺であるが、東日本大震災で被害を受けたという。口縁部はゆるく外反し、頸部は太目で、胴部はゆるく膨らみ、底部は不明である。復元口径 24.5cm、胴部最大径 31.5cm、器厚 0.9cm を測る。口縁外側に断面三角形の突帯が巡り、ヘラ先による強い押捺が加えられている。その直下から口辺部には幅 3cm 前後の横走条痕文帯が巡り、さらに縦位条痕文帯・横走条痕文帯・波状条痕文帯（1 段）が巡る。胴部には、幅 4～5cm の横走条痕文帯・波状条痕文帯（2 段）・横走条痕文

帯が配され、その下位に縦位羽状条痕文が施されている。

この条痕文土器は、県内では相模原市中野大沢遺跡、南足柄市怒田上原遺跡例に類似し、鶴見川流域では緑区霧ヶ丘遺跡例がある。この時期の様相を4段階に編年した谷口は、上記諸例をその第3期に位置付けている（谷口1991b）。また、6の条痕文系土器については、「駿河～伊豆方面で中期初頭に製作されたもの」で、「水神平式の影響を受けた東海系条痕文土器」と結論づけている（谷口氏教示）。

その他、突帯文をもつ東海系小型壺口縁部、条痕文をもつ壺、甕（？）の底部破片などが出土している。

5. 口縁上端内側に刻目文を施す土器の意義（写真1、第16・17図）

大場富士塚遺跡出土の朝光寺原式土器について、赤田遺跡群出土土器との比較を通してその様相を見てきた。両者の集落間においては、その最盛期に時間的なズレが存在している。渡辺は、赤田谷を取り囲む遺跡群内の分村と移住を想定しているが（渡辺1998）、その視野を近接遺跡にまで広げることが可能で、赤田遺跡群No.14遺跡と大場富士塚遺跡との間には、物の移動だけでなく、土器製作者の移住（移動）があった可能性が高いと考えられる。

また、人の移住（移動）に関しては、口縁上端内側に刻目文を施す土器（「A類土器」とする。）と、折返口縁をもつ土器（「B類土器」とする。）に注目すると、前述したように、東京湾岸系土器の製作手法の影響を強く看取できることから、物の移動だけではなく人（土器製作者）の移動を想定しなければならない。これらの施文手法は、A群土器は赤田Ⅱ期から認められⅤ期・終末期まで存在し、B群土器はⅠ期～Ⅲ期まで存在するようである。

A類土器の出土軒件数を見ると、赤田遺跡群の各遺跡より大場富士塚遺跡の方が高い数値を示している（第9・11図）。また、時期別の比率も高い。いずれにしても、両者における出土量は、管見する限り他の遺跡を圧しており、口縁部における変容は両遺跡のいずれかにおいて発生したと想定される。

次にA・B類土器の両者が出土しているNo.1遺跡のYT2を見ると、集落は等高線に沿って東西に展開しているが、YT2は集落北端部に20m離れて存在している。小舌状部先端の緩斜面で、標高が1mほど低位置にある。B類土器を出土したYT5は、検出住居址の中では大型で、集落東端に位置している。図示しなかったが、大型のYT1にもB類土器が出土しており、本遺跡では大型住居址にB類土器が存在したことになる。検出された5軒のうち4軒に東京湾岸系土器の手法がみられた。

No.10遺跡においてもNo.1遺跡と同様に、検出された5軒の住居址のうち4軒にA類（YT2・4）とB類（YT1・3）土器が出土している。尾根部が調査区外となっているため、集落全体における住居址の位置関係が明確ではないが、南に延びる尾根上に住居址の存在を想定すると、これらは集落の北端に位置しているといえる。占地を見ると二分でき、尾根上にあるYT3に対し、YT1・2・4は20mほど西に離れて並んでおり、標高も2～3m下がっている。No.10遺跡は、Ⅰ期（YT1）・Ⅱ期（YT3）・Ⅲ期（YT2・YT5）・Ⅳ期（YT4）と連続的に住居址が形成されており、占地における何らかの規制があった可能性が考えられる。No.1・No.10遺跡とも調査区の限定があるものの、検出住居址のほとんどに口縁上端内側に刻目文を有する土器を持っており、集落全体の様相として捉えられる。

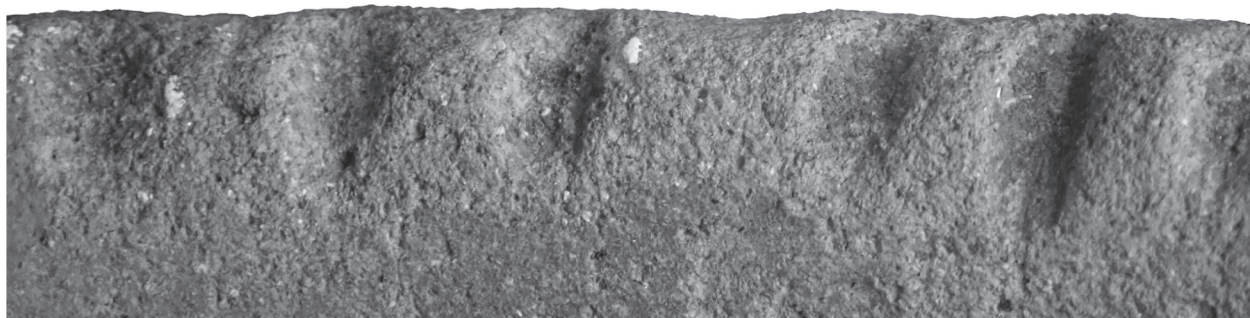
No.17遺跡においては、A類土器がYT4～6住居址の3軒から出土している。これらは、尾根から下がった肩部斜面に位置している。これらの下位に住居址は存在しておらず、集落の外れに位置していることになる。本遺跡は本来小黒谷遺跡であり中央大学調査部分（Ⅰ・Ⅱ）に集落の4分の3が存在している（上野・



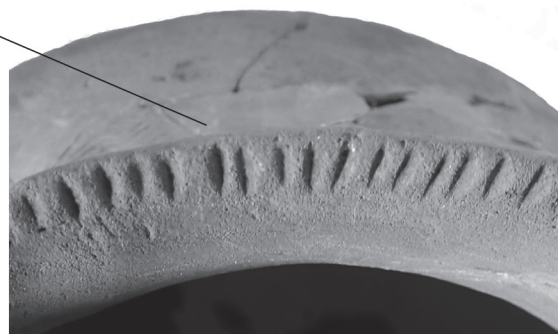
口縁上端内側の刻目文



4
YT9



ヘラ状工具による口縁上端内側の刻目文施文状況（4：YT9）

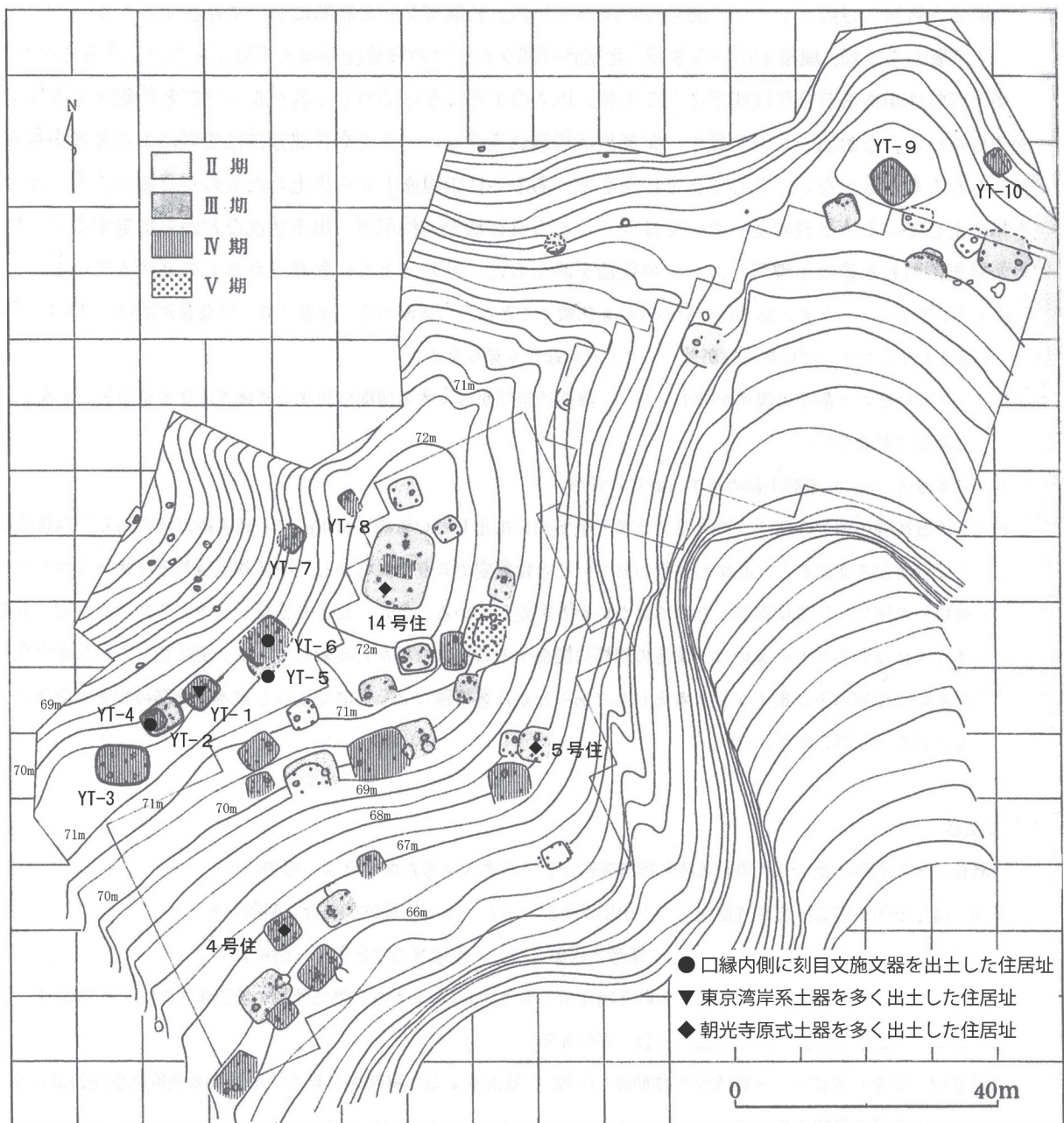


8
YT17

YT17（図版なし）

写真 1 大場富士塚遺跡出土の口縁上端内側に刻目文を施す土器（YT9-4、YT17 宮田撮影）

池上 1973)。渡辺が両遺跡を合成して時期別遺構分布図を作成しており、集落の全体像が理解できる（渡辺 1998）。すなわち第 16 図のように、YT4～6 は標高 70～71 m の等高線に沿って並ぶようにまとまって存在しており、グループ化している点では、大場富士塚遺跡南群の在り方と共通性があると言えよう。これに対し、折返口縁を有する朝光寺原式の B 群土器を出土する住居址は存在していない。しかしながら、YT4 と YT5 の間に位置する YT1 は、東京湾岸系土器を多く検出した住居址であり、東京湾系土器の製作伝統を受け継いでいるという点でグルーピングが可能であり、4 軒が同じ等高線上に並んで存在している。一方、尾根の最頂部（標高 72 m）に隅丸長方形の大型住居址（長軸長 13 m）14 号住があり、多くの朝光寺原式土器が出土している。それを取り囲むように、弧状を成して北側に 4 軒、南側に 6 軒の住居址（重複を含む）が近接して並んでいる。後者は西側（標高 70～71 m）に並ぶ 7 軒（重複を含む）に近接している。



第 16 図 赤田遺跡群No.17 遺跡（小黒谷遺跡）における口縁上端内側に刻目文をもつ土器を出土した住居址－渡辺 1998 を改変－

さらに、14号の南南東24mに4軒の一群、南南西38mに8軒の一群が存在する。これらは標高66～68mの等高線に沿って南側緩斜面に並んでいる。この二つの群には、それぞれ朝光寺原式土器を多く出土した4号と5号住居址が存在している。すなわち、集落内において、南側斜面に朝光寺原式土器を主体とするグループ、北側斜面に東京湾岸系土器製作手法を継承するグループという棲み分けが存在した可能性が考えられる。しかし、北側斜面グループの全てにA群土器があるわけではない。Ⅳ期において見れば、4軒中の2軒であり50%という数値を示すが、遺跡全体で見れば18軒中2軒で11%にすぎない。

口縁上端内側に刻目文を有する朝光寺原式系土器（B類土器）の出土例は、赤田谷戸入口部南側で早淵川右岸の関耕地遺跡45号住・40号住などにおいて認めることができる（田村ほか1997）。関耕地遺跡では赤田Ⅱ新期～Ⅲ期に併行するものであり、櫛描波状文と無文の甕が存在している（第17図5～8）。

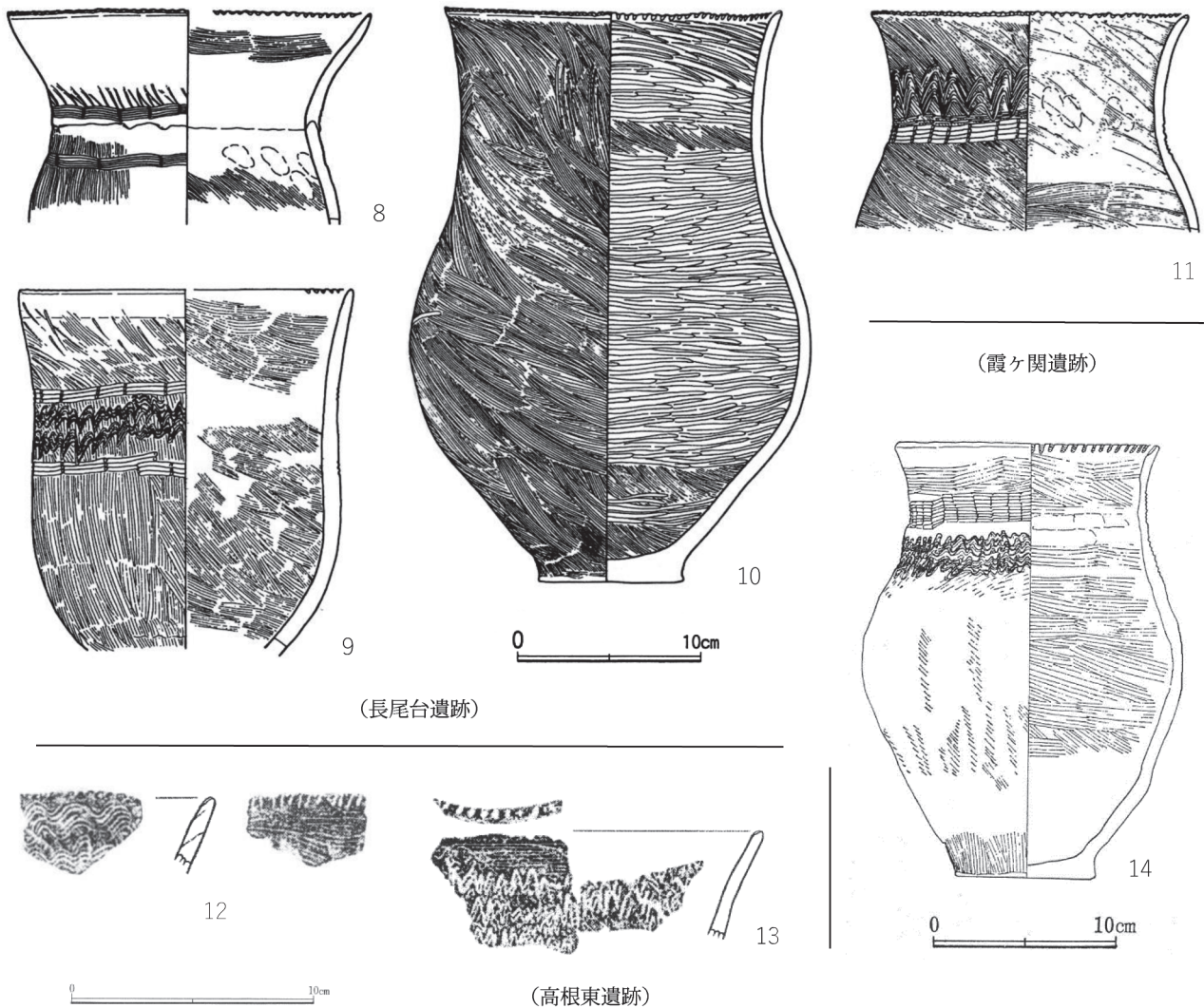
また、朝光寺原式土器分布圏の北部に当たる多摩川右岸の川崎市長尾台北遺跡（相川・北村1997）、同高根東遺跡（小葉2017）において認めることができる。長尾台北遺跡第14号住居址は、壺2個体の存在から赤田Ⅰ期（古）に位置付けられたものであるが、共伴とされる第17図6～8が同時期の所産だとすれば、刻目文の内側施文手法は、赤田Ⅰ期（古）段階には出現していることになる。しかし、これらの出土状態を見ると、壺2個体と同時期とするには検討の余地があるように思える。したがって、現時点では長尾台北遺跡第14号住居址を最古とするのは保留としておきたい。東高根遺跡例（第17図9）は、波状文が口唇部直下まで施文されるもので古い様相を示すが、刻目文は細長い棒状を示している。

さらに、遠く離れた埼玉県川越市霞ヶ関遺跡においても1例（第17図10）ではあるが認めることができる（埼玉県1982）。朝光寺原式土器分布圏北端部からは北西に約30km、朝光寺原遺跡からは北北西に40km以上離れた地であるが、口縁上端内側に刻目文を施す手法の波及は、関東山地・同山麓で繋がっているという視点で理解して行くことが重要である。

以上述べてきた刻目文の施文手法は、朝光寺原式土器の中では特異な手法であり、少数派である。この施文手法は、東京湾岸系土器の影響を受けて、赤田Ⅱ新期に大場富士塚遺跡において出現している可能性がある。赤田Ⅱ新期～Ⅲ期段階には、赤田遺跡群にもこの手法が広がっている。さらに、遠く川越市霞ヶ関遺跡にまで点的に拡散を示している。このような施文手法の伝播には人の介在が不可決である。東京湾岸系土器の製作手法を朝光寺原式土器の中に取り込み、しかも、刻目文施文手法の一つの流行を作り伝統として継承し、拡散している。その背景には、何らかの意志を共有する人々の存在が浮上する。東京湾岸系土器そのもの土器を製作するのではなく、朝光寺原式土器を製作する中で、口縁部の内側のみに土器製作者の血脈（出自）を示していると思われる。屈折的とも思える出自の表現法を採る人々が、少数派ながら朝光寺原式土器を主体的に使用する集落内に存在している。同様のムラが赤田谷戸周辺にも認められる。これは、土器製作者個人の意志もさることながら、共有できる人々と、共有させる何らかの集団的な意志が関わっていると看取することができる。

古屋紀之は、「土器様式圏が表す人間集団」を論じる中で、在地土器ではない異系統土器の存在について、血縁関係を有する同一出自集団として捉え、「部族」・「氏族（クラン）」、さらに下位概念の「リネージュ」という単位集団を念頭において捉えようとしている（古屋2017）。しかし、前述したA類土器を単純に異系統土器（非在地土器）の範疇で捉えるには無理があり、ピラミッド型階層社会の下部を形成する「リネージュ」の一つとして、あるいは、さらに下部の単位集団として、当てはめることも、A類土器の属性を理解することには繋がらないのではないだろうか。

赤田谷周辺に形成された弥生後期の集落の中には、①朝光寺原式土器を主に使用するグループ、②壺や鉢



川崎市長尾台遺跡（8～11）・高根東遺跡（12・13）／川越市霞ヶ関遺跡（14）

第 17 図 他遺跡における口縁上端内側に刻目文を施す土器

など一部の器種に東京湾岸系土器を使用するグループ、③東京湾岸系土器を主に使用するグループ、④朝光寺原式土器の口縁上端に東京湾岸系土器の施文手法を表現するA類土器をもつグループなど、いくつかの単位集団が存在する。それぞれが遺跡における集落形成に関わり、さらに大きな枠の単位集団（社会集団）を形成している。

大場富士塚遺跡や赤田遺跡群No. 17（小黒谷）遺跡などでは、集落内における住居址の占有位置や大型住居址の在り方などから階層差がある可能性を想定できた。これを住居址単位で見ると、赤田遺跡群No. 17（小黒谷）遺跡の赤田Ⅳ期の住居址においては、北側斜面に連なって占地する4軒のグループの内、2軒（YT4・YT6）がA類土器を持ち、1軒（YT1）は東京湾岸系土器を多くもつ住居址である。同一グループの中に、出自の表現方法に違いが認められており、言い換えれば、一つの集落内に少なくとも二つの出自を表現する方法が存在していることになる。これを出自（血脈）の異なる二つの「リネージュ」ととらえることもできるが、④のグループは、広い地域への拡散と一定の継続性を示しており、当然一つの単位集団（「リネージュ」や氏族）から拡散したとは考え難く、A類土器そのもの、あるいはA類土器を持つ人々は、別のファクターでとらえるべきではないだろうか。たとえば、共通のアニミズム（始祖霊）崇拝を有するなど、信仰的観点か

ら理解することが可能ではないかと考える。

いずれにしても、朝光寺原式土器の口縁上端内側に、あたかも出自を象徴するかのような刻目文を表現しており、強い意志が感じられる。A類土器の属性（背景）を追求することが、朝光寺原式土器文化圏における弥生後期集落（社会）解明の一方法となり得るだろう。

おわりに

以上、大場富士塚遺跡の主要な弥生土器を紹介し、併せてその特色についてふれてきた。本遺跡の朝光寺原式土器は、標識たる朝光寺原遺跡のそれとは異なり、口縁上端内側に刻目文が施されているものがある。この施文技法（「大場富士塚タイプ」と仮称する。）は、近隣の赤田遺跡群から武蔵野台地の川越市霞ヶ関遺跡まで及んでいる。当時の生活圏の一標徴と考えるが、その意義はこれまでの調査資料の検討や今後の調査の中でより明らかにされるものと考えてる。

本遺跡からわずか上流 1.5km に位置する川崎市早野上ノ原遺跡では、長方形の焼失家屋（SI14）から東京湾岸系の壺と共に、朝光寺原式の無文平底甕が出土している（吾妻考古学研究所 2013）。この土器は、本遺跡南方の横浜市鹿ヶ谷遺跡 8 号住居址の平底甕と酷似し（坂本・宮田 2021b）、朝光寺原式の構形成態であることが明らかになった。

及川良彦は、多摩地域の弥生時代を概観する中で、朝光寺原式は久ヶ原・山田橋式及び岩鼻・吉ヶ谷式前半と併行し、1～2 C 前半の年代を与えている。後期中葉の多摩では、東京湾岸系の久ヶ原縄文主体土器、中部高地系の櫛描文主体朝光寺原式、相模湾側の縄文系土器、比企丘陵の縄文主体吉ヶ谷式などが、モザイク状に入り乱れていたと考えている（及川 2021）。

この中で取り上げられた調布市染地遺跡からは、多摩川北岸の微高地から朝光寺原式期の集落址が発見された。後期後半の竪穴住居址 29 軒が流路跡の両岸に分布し、10 m 以上の大型住居址が存在する。流路跡からは建築部材が出土し、都内 3 例目の小銅鐸が出土した。土器は東京湾岸系（久ヶ原式）、吉ヶ谷式もあるが、朝光寺原式が最も多い（調布市郷土博物館 2023）。SI163 では朝光寺原式終末段階の土器が五領式土器と共伴し、朝光寺原式の下限が古墳時代前期に併行する可能性が出てきたという（及川 2023）。北関東における樽式、吉ヶ谷式、十王台式、上稲吉式などにおいてはすでに周知されている様相であり、朝光寺原式土器においてもこのような実態は明白となるであろう。染地遺跡の報告書は刊行されており（及川・山田 2023）、今後検討を行いたい。

また、染地遺跡の存在は、朝光寺原式期を検討する上で、二三の示唆を与えてくれる。その第一は、多摩川低地に立地していることで、同様な状況の鶴見川流域の低地における探索が不可欠であるという認識を改めて痛感した。

第二は、朝光寺原式の中心的な分布圏に隣接して、このような大型集落が存在する点である。これによって、ほぼ多摩丘陵に限定されていた朝光寺原式分布圏はさらに広がりをもせると思われる。これは昨年筆者らが明らかにした横浜市三殿台遺跡の例（坂本・宮田 2022a）からも明確である。

第三は、吉ヶ谷式との関わりである。同式は比企丘陵～武蔵野台地から遠く離れた小田原まで及んでいるが、とりわけ多摩丘陵東部に集中している（及川 2021）。この地域こそ、朝光寺原式の中心分布地域とされており、両型式の関係性がより深く問われなければならない。北関東の岩鼻・吉ヶ谷式と南関東の朝光寺原式との相関は柿沼幹夫によってまとめられている（柿沼 2009）。一方佐藤康二は、吉ヶ谷式の成立について

「仮称「上星川式」段階の甕組成が比企丘陵に波及し、縄文施文に単一化されるという独自の発達をもって吉ヶ谷式が定型化した」という仮説を提唱している（佐藤 2012）。いわば、朝光寺原式土器文化圏の中から北関東の土器が成立したという視点である。興味深い視点であり、大場富士塚タイプの土器が、北への広がりを示した背景を考える上でも参考にしなければならない。

このような遺跡・遺物の新しい研究潮流の中に、仮称「大場富士塚タイプ」の提示も一つの意義があると考えられる。朝光寺原式土器をより広く・深く知るために、多少なりとも役立つことができれば幸いである。

また、小文を一つの契機として、大場富士塚遺跡の正報告書が刊行されることを強く願うものである。

本小稿を草する機会を与えて頂いた水野順敏氏・日本窯業史研究所に感謝したい。特に水野氏には、大場富士塚遺跡出土遺物の熟覧や写真撮影、図版コピーなど最大限の便宜を図って頂いた。ならびに、大場富士塚遺跡の調査担当者であった渡辺 努氏にも、種々の有益なご教示を頂いた。また、谷口 肇・古屋紀之氏には、土器編年に関する丁寧なご教示を頂いた。さらに、及川良彦・浪形早季子・長岡文紀・橋口 豊・林浩一各氏にも大変お世話になった。明記して謝意を表する次第である。（2024 年 1 月 10 日稿了）

【参考・引用文献】

- 相川 薫・北村尚子 1997『川崎市多摩区 長尾台北遺跡発掘調査報告書』長尾台北遺跡発掘調査団
吾妻考古学研究所 2013『川崎市麻生区早野上ノ原遺跡－第1次～3次発掘調査概要報告書－』川崎市建設
緑政局
安藤弘道 2019「第4章分析・考察 1. 日吉台遺跡群の弥生土器について」『日吉台遺跡群発掘調査報告書
2006年度～2014年度の調査成果』慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室
伊丹 徹・池田 治 2000「神奈川県における弥生後期土器編年」『東日本弥生後期の土器編年〔第1分冊〕』
東日本埋蔵文化財研究会・福島県立博物館
上野佳也・池上 悟 1973『小黑谷遺跡発掘調査概報』中央大学考古学研究会
大川 清・水野順敏・渡辺 努 1983「横浜市黒須田・大場第1地区遺跡群の調査 大場・富士塚遺跡」
『第7回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』第7回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会
及川良彦 2021「多摩地域の弥生時代」『「邪馬台国」時代の多摩～3世紀の多摩で何が起こっていたか～』
多摩地域史研究会第29回大会発表要旨 多摩地域史研究会
及川良彦・山田和史ほか 2023『調布市染地遺跡－第128地点（多摩川住宅商業施設建設に係る埋蔵文化財
発掘調査）－』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第374集 （公財）東京都埋蔵文化財センター
及川良彦 2023「多摩川沖積低地 地下2mのシルト世界～調布市染地遺跡128地点の調査から～」『東京
の遺跡』No.125 東京考古学談話会
大木紳一郎 2000「岩鼻式と樽式土器－後期縄文土器生成をめぐって」『埼玉の弥生時代』埼玉弥生土器
観会 六一書房
岡本 勇 1958「第二章 弥生時代」『横浜市史』第1巻 横浜市
岡本 勇・武井則道 1969「朝光寺原式土器について」『昭和43年度横浜市埋蔵文化財調査報告書』横浜市
埋蔵文化財調査委員会
岡本 勇 1986「第3章 水稻耕作の開始と発展」『神奈川県史 通史編1』神奈川県

- 柿沼幹夫・佐藤幸恵・宮島秀夫 2008「岩鼻式土器から吉ヶ谷式土器へ」『国土館考古学』4 国土館大学考古学会
- 柿沼幹夫 2009「北武蔵中央部の後期土器」『南関東の弥生土器2～後期土器を考える～』考古学リーダー 16 六一書房
- 小栗一夫 2017『県史跡・東高根遺跡－公園に眠る古代遺跡－』川崎学双書シリーズ3
- 小林 茂 1969「土製勾玉が出土する」『いなりまえ』2 稲荷前古墳群調査団
- 小西絵美・高橋 香『新羽浅間神社遺跡』かながわ考古学財団調査報告 293（公財）かながわ考古学財団
- 埼玉県 1982『新編埼玉県史 資料編2 原始・古代 弥生・古墳』
- 坂本 彰 2007「Y1号住居址」『北川貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 39（公財）横浜市ふるさと歴史財団
- 坂本 彰 2021a「横浜考古学史1・高津真亮」『横浜市歴史博物館紀要』第25号 横浜市歴史博物館
- 坂本 彰・宮田 毅 2021b「幻の朝光寺原式土器基準資料－櫛描波状文のある弥生台付甕－」『利根川』43 利根川同人
- 坂本 彰・宮田 毅 2022a「朝光寺原式土器の根源的研究－朝光寺原・三殿台遺跡を中心に－」『横浜市歴史博物館紀要』第26号（電子版）横浜市歴史博物館
- 坂本 彰・宮田 毅 2022b「「荏田式」土器の再検討」『利根川』44 利根川同人会
- 佐藤敏也 1983「大場・富士塚遺跡 YT-1号住居址出土の炭化米粒」『日本窯業史研究所年報Ⅱ』日本窯業史研究所
- 佐藤康二 2012「吉ヶ谷式土器成立に関する覚書」『千葉大学考古学研究室30周年記念 考古学論攷Ⅰ－岡本東三先生退職とともに－』六一書房
- 設楽博己 2021「出土土器の編年的位置付け」『千葉県荒海貝塚の発掘調査』国立歴史民俗博物館研究報告 第227号
- 谷口 肇 1991a「神奈川「宮ノ台」以前」『古代』第92号 早稲田大学考古学会
- 谷口 肇 1991b「神奈川県下の縄紋終末～弥生初頭の遺跡～」『第1回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における稲作の受容』第2分冊 東北・関東地方 東日本埋蔵文化財研究会
- 田村良照・戸田哲也・麻生順司 1997『横浜市観福寺北遺跡群関耕地遺跡発掘調査報告書』観福寺北遺跡発掘調査団
- 田村良照 1998「朝光寺原式の属性（前編）－観福寺遺跡群の検討から－」『神奈川考古』第34号 神奈川考古同人会
- 田村良照 2013「朝光寺原式の属性（後編）」『神奈川考古』第39号 神奈川考古同人会
- 浜田晋介 2002「多摩丘陵・下末吉台地における弥生集落の構造」『川崎市民ミュージアム紀要』第15集 川崎市民ミュージアム調布市郷土博物館編 2023『発掘された染地遺跡～多摩川低地のムラ～』調布市郷土博物館
- 浜田晋介 2009「朝光寺原式土器の編年と共伴土器」『南関東の弥生土器2～後期土器を考える～』考古学リーダー 16 六一書房
- 浜田晋介 2015「コメント 朝光寺原式土器からみる集団構成論メモ」『考古学リーダー 24 列島東部における弥生後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』
- 古屋紀之 2013「横浜市都筑区北川谷遺跡群における弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年」『横浜市歴

史博物館紀要』第17号 横浜市歴史博物館

古屋紀之 2014a「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域圏とその動態」『久ヶ原式・弥生町期の現在－相模湾／東京湾の弥生後期の様相－』西相模考古学研究会

古屋紀之 2014b「第3章考察 第2節 弥生時代終末期～古墳時代前期前半」『権田原遺跡Ⅲ 弥生時代後期～古墳時代前期編』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財発掘報告書47（公財）横浜市ふるさと歴史財団

古屋紀之 2015「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域圏とその動態」『列島東部における弥生時代後期の変革～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』西相模考古学研究会編 六一書房

古屋紀之 2017「人間集団を映す甕－弥生時代後期の甕から見た南武蔵南部の部族－」『平成28年度特別展 土器から見た大田区の弥生時代－久ヶ原遺跡発見、90年－』

古屋紀之 2023「第4章 第2節 弥生時代後期土器の編年的位置づけと集落の様相」『舞岡熊之堂遺跡－舞岡新墓園事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－（第2分冊）』（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター

緑区史編集委員会 1986「大場富士塚遺跡」『緑区史資料編』第2巻 緑区史刊行委員会

水野順敏・渡辺 努 1983「黒須田・大場第1地区遺跡群」『日本窯業史年報』Ⅱ 日本窯業史研究所

水野順敏 1981『富士塚地区遺跡群発掘調査報告書』富士塚地区遺跡群発掘調査団

持田春吉・村田文夫 2007『川崎市宮前区平 東泉寺上遺跡D地点発掘調査報告書』東泉寺上遺跡D地点発掘調査団

柳沢一男 1969「横浜市出土の終末期縄文式土器と石器」『上代文化』國學院大學考古学会

柳田敏司・昼間孝次 1974「川越市霞ヶ関遺跡第三次発掘調査概要」『第7回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉県考古学会

横溝 潔 1996『山内のあゆみ－石川編－』音羽書房鶴見書店

渡辺 努 1994『横浜市緑区 赤田遺跡群 集落編Ⅰ－No.1遺跡、No.2遺跡、No.6遺跡、No.10遺跡－』日本窯業史研究所

渡辺 努 1995「朝光寺原様式の基礎的研究」『王朝の考古学』雄山閣

渡辺 努 1997「付編 長尾台北遺跡出土の朝光寺原式土器について－14号住居址出土遺物が提起する朝光寺原式出現期の問題をめぐって－」『川崎市多摩区 長尾台北遺跡発掘調査報告書』長尾台北遺跡発掘調査団

渡辺 努 1998『横浜市緑区 赤田遺跡群 集落編Ⅱ－No.12遺跡、No.14遺跡、No.15遺跡、No.17遺跡－』日本窯業史研究所

渡辺 努 2001「その頃南武蔵の片隅で」『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』西相模考古学研究会

渡辺 努 2015「大場第二地区遺跡群出土の鏡について」『古鏡－その神秘の力－』川崎市市民ミュージアム

坂本 彰〔元（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化センター調査研究員〕

宮田 毅〔元群馬県太田市教育委員会〕